

拡大する「つながり」、今からがはじまり

石田智子
(プロジェクト研究担当)

プロジェクト研究は、学生各自がこれまでに培ってきた基礎的教養や専門性を基軸として、能力や技術をさらに発展させることが目的です。専門分野の枠組をこえて議論することは、新たな切口や視点から自身の研究姿勢や対象を見つめなおす機会になります。さらには、自己の研究を客観視・相対化することで、単なる個人的な知的好奇心の充足にとどまるのではなく、世界や地域社会が抱える課題を発見し解決に取り組む、専門家として行動することができる人材を育成することを目指しています。

今年度のプロジェクト研究は、「社会と文化におけるネットワークフォーマルとインフォーマルの狭間で―」の統一テーマのもとで、受講生3名が個人研究の成果を発表しました。わたしたちは一人では生きていけません。世界から分離して存在することもできません。すべての要素はネットワークでつながっています。また、組織化・制度化された関係だけでなく、趣味や性格を介して人間的に触れ合う関係など、多様な位相にわたる関係をネットワークが横断して結びつけることで変化や多様性が生じ、ネットワークが常に更新され続けます。そこで、具体的な各事例に基づいて複雑な状況を解きほぐすことで、ネットワークの形成・変容プロセスを探ることを全員の共通目的として設定しました。

しかしながら、統一テーマの設定、各自の研究テーマとの照合、限られた時間の中での調査計画の立案と実施、研究成果の整理と発表など、研究の各プロセスにおいて、学生・教員はともに大いに苦慮しました。統一テーマと各自の研究がどう関係するのか、専門分野内では当然の概念や方法が他分野の人間にはなぜ通じないのか、自分の主張したいことがなぜ伝わらないのか。これは無意識に決めつけている自身の限界を突き破るために全員にとって必要な煩悶であり、忍耐強く繰り返し発表し、対話し、修正し、前進し続けることで、ようやく突破口を見出しました。結果は不完全な

ものかもしれませんが、回り道をしながらも自力で目的地にたどり着いたことに意味があります。

個別発表後のディスカッションでは、ネットワークの成立要因やフォーマル／インフォーマルの相互作用、変化の速い情報化社会である現代社会においてネットワークの形成がこれからどのように変わっていくのかについて議論しました。個別発表では実世界における体験の共有や距離感が重視されましたが、将来的にはSNSなどのネットワークやテクノロジーを介してゆるやかに長くつながり続ける傾向が強まる可能性を提起しました。

報告会を終えて、社会や文化におけるネットワークの結節点がほかならぬ自分自身であることに、学生たち本人は気づいているのでしょうか。わたしたちには、過去と現在、個人と社会、最先端の学問と社会の課題をつなぐ役割が求められています。これからは研究成果を発信し続けることで、ネットワークの形成や維持、さらなる拡大に寄与することが期待されます。プロジェクト研究を乗り越えたことで、全体を俯瞰しながら、一歩ずつ、着実に先に進む能力を習得したと信じています。

今年度の指導は、松田忠大教授（地域政策コース）、石田（文化政策コース）、萩野誠教授（島嶼政策コース）、熊華磊特任助教が担当しました。特に、熊助教の厳しくも温かくきめ細やかな指導のおかげで、目標を達成することができました。報告会では、小栗有子先生（法文学部法経社会学科准教授）と多田蔵人先生（法文学部人文学科准教授）から貴重なコメントをいただきました。お世話になりました多くの方に厚く御礼申し上げます。

石田 智子（いしだ ともこ）

鹿児島大学法文学部人文学科准教授。大学院人文社会科学研究科地域政策科学専攻「考古資源論」担当。

目 次

巻頭文

拡大する「つながり」、今からがはじまり	石田智子	<i>i</i>
---------------------	------	----------

報告

住民運動におけるネットワーク的連帯の展開について —1993年の喜入における産廃反対運動を事例に—	日高優介	5
韓国の兵役における個人の人間関係とその動向	山下 慶	13
文献に描かれた「曾槃像」 —「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」を中心に—	景 徳	23
平成30年度プロジェクト研究概要	熊 華磊	37
プロジェクト研究を振り返って		43

住民運動におけるネットワーク的連帯の展開について —1993年の喜入における産廃反対運動を事例に—

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 島嶼政策コース1年
日高優介

1. 序論

1.1 研究の背景

近年、我が国においては地域社会における課題について焦点化されている現状が存在する。少子高齢化、過疎化、無縁社会、社会福祉など公的サービスの不具合や安全といった地域社会における課題に対して、自助・互助・共助の元に取り組む、コミュニティの再興が「地域づくり」の文脈で進行している。特に、2011年の東日本大震災以降、「絆」「つながり」といった人びとの結びつきに対する意識の高まりを捉える事ができる。このような「コミュニティ待望論」ともいえる状況とは対照的に、人びとと地域をめぐる状況には困難が生じている。吉原直樹は「ポスト3・11の地層から—いまコミュニティを問うことの意味」(2013)という論考の中で、震災以前に東北電力と行政主導の下で町内会や区会といった単位で開催された避難訓練が震災時にまったく機能せず、人びとは近所の人にもくねず、家族と避難していた様子を「「あったけど、なかった」コミュニティ」と表現している。吉原の論考からはコミュニティ待望論と乖離する地域社会の実態が示され、人びとと地域課題への接続への困難さを捉える事ができる。近代の進行に伴う個人化という潮流において、社会課題は個人の課題として転嫁される。また、小熊(2016)が指摘するように、社会課題へ直接的にスマートフォンなどを通じてアクセスする「課題圏」という大きな枠組みへの接続という傾向が示される。一方で上記に示した両パターンの中に座する地域社会を基盤とした社会課題へのアクセスは困難である。そこで、本発表では住民運動の展開を題材に、社会問題の構築主義という分析枠組みに依拠し、なかで

も社会運動過程における「レトリック」に着目し、住民のネットワーク的連帯が展開し、地域における社会問題がどのように地域課題として成立し、住民運動を展開したかを明らかにする。その際に対象とするのは1993年から1994年にかけての鹿児島県の旧喜入町(現鹿児島市喜入)における産廃処分場誘致計画に対する反対運動である。本事例を取り扱うのは、対象となる地域の2つの地区において、社会課題が個人の位相から地域の課題という位相へ変遷していく中で、異なる地域状況が存在し、異なる社会問題過程を経て展開していった様相を捉える事が可能だからである。

本節に続く以下の項では、分析枠組みである「社会問題の構築主義」について概要を提示し、その上で研究対象地である鹿児島県旧喜入町の概要について述べる。

1.2 分析枠組み

「社会問題の構築主義」とはブルーマーの論考(Blumer 1971=2006)に端を発し、スペクターとキツセ(Spector & Kitsuse 1977=1990)を嚆矢とする社会問題に関する集合行動論的アプローチである。同アプローチの目的は社会問題の生成過程を分析する作業を通じて、そうした活動の連鎖をもつ社会の仕組みと特徴を解き明かそうとするものである。種々の社会現象は、世論がその問題をどのように見るかによって、社会問題になることもあれば、ならないこともある。ある社会現象が社会問題であると主張することを「クレイム申し立て」と、クレイム申し立てへの反論を「対抗クレイム」という。クレイム申し立てと対抗クレイムとが論争をするなかで世論が定まっていく。このような場を構築主義では、「公共のアリーナ」という。

公共のアリーナで勝利した集団や組織はさらに社会問題の「所有権」をもつようになる。クレーム申し立て活動は、他のクレーム活動との相互作用のなかで継承されたり、批判されたり、再定式化されたりする。構築主義は、そうした変化が「なぜ」生じたかを歴史的に説明することを通して、そうした活動の連鎖をもつ社会の仕組みと特徴を解き明かそうとするものである。我が国における代表的な構築主義の研究者である赤川はコンテクスト派とされる構築主義者のベスト (Joel Best) の説に依拠して社会問題過程を、クレーム申し立て (CM) →メディア報道 (MC) →大衆の反応 (PR) →政策形成 (PM) →社会問題ワーク (SPW) →政策の影響 (PO) の6つのプロセスから成るものと捉える。その上で、これらの6プロセスを一つの連の流れとする。

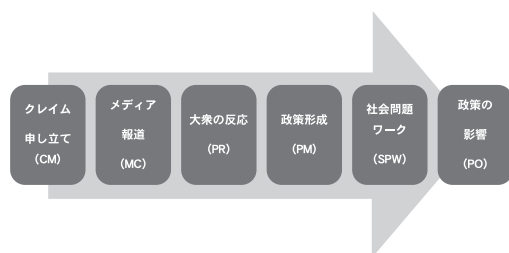


図1 自然史モデル¹

以上のプロセスは、ある問題がなぜ特定の時期に特定の場所で起こるのかに着目したモデルであり、クレーム申し立てのプロセスの共時的、通時的比較を意識したものである。問題（仮に X とする）と比較する軸として、通時的比較（問題 X の初期の申し立て）、空間的比較（他地域での問題 X の申し立て）、問題 X と類似する他の問題の申し立てとの比較、他の比較のための基礎（レトリック、申し立て者）なども、各々クレーム申し立て (CM) →メディア報道 (MC) →大衆の反応 (PR) →政策形成 (PM) →社会問題ワーク (SPW) →政策の影響 (PO) に分類することにより、これらの比較を可能なものとする。

¹ 赤川（2012）を参考に筆者作成

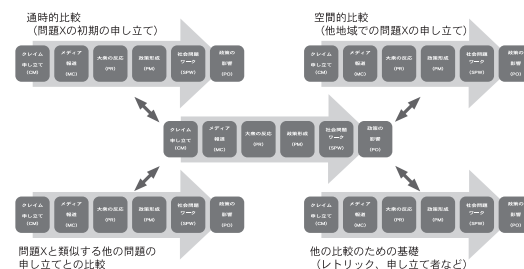


図2 問題 X に関する社会問題過程²

しかし、このプロセスについて、赤川は我が国の社会問題過程を対象とした修正を行う。従来の自然史モデルにおいて、「クレーム申し立て」から「政策の影響」までのプロセスが単線的に進行するかのようになるのは、草の根運動的なクレーム申し立てが先行し、世論形成やメディア報道を経由して、政策形成につながっていくという、アメリカ民主主義的な問題構築の過程が前提となっていると指摘する。その上で、様々な問題について自然史モデルを適用するうえで、単線的なプロセスではなく、各ステージ間の揺り戻しや後退、1つのステージ内部におけるさまざまな相互作用の状況が起こりうる「経路依存性」といった形での自然史モデルの修正を行っている（赤川 2013: 62）。

また、我が国の社会問題に特徴的な類似点として、政策形成が先行し、他のプロセスが後追いする展開についての指摘も行っている（赤川 2013: 61）。

本発表では、旧喜入町内の瀬々串地区と生見地区の各々の社会問題過程を空間的比較として検討すると共に、他の比較のための基礎に分類されるレトリックの比較を行った。レトリックについて検討する際に焦点を置いたのは「レトリックのイデオロム」である。「レトリックのイデオロム」とは赤川によれば「特定の状態がなぜ放置できず、何らかのかたちで社会的に対処しなければならないのかを説明し、理解可能にするためのもの」（赤川 2012: 78）であり、社会問題のアクターたちはレトリックのイデオロムを駆使することで社会運動を拡大、展開する。本発表では、これらの検討を通し、喜入における反対運動の住民たちがどのようなレトリックのイデオロムを用いて地域的反対運動を成立、展開していったか明らかにする事を目的とする。

² 赤川（2012）を参考に筆者作成

1.3 調査対象地喜入の概要

本項では調査対象地である旧喜入町について、近代以降の状況の概要を提示する。薩摩半島の中に位置し、南北 16 キロの海岸線を有する旧喜入町は 1889 年（明 22）の町村制施行に伴い喜入村として誕生する。その際、北から順に瀬々串、中名、一倉、喜入、前之浜、生見の 6 つの行政区として設定された。1956 年に喜入村は町制施行し喜入町となるが、2004 年の平成の大合併により鹿児島市へと編入される。

終戦後の 1950 年の国勢調査で 17,541 人いた人口は、我が国の戦後成長と共に急激に減少し、後述する 1969 年の石油備蓄基地操業時には 11,708 人となる。その後、基地の操業開始と共に、基地で労働するために都市へ流出した若い人びとが帰郷したことや、基地からの収入が増加し喜入町におけるインフラが整備された事に伴い余所から移り住んで来た人びとが増えたため人口が増加する。2000 年までに 12,802 人へと漸増するも、以後は減少へと転じ、2015 年の国勢調査では 11,341 人となっている。

旧喜入町の主要な産業は農業であった。1896 年には 1529 戸あった専業農家は 1934 年の 2460 戸へと漸増したが、就農戸数は、1950 年には 1911 戸へと減少へと転じ、1970 年には 643 戸と大幅に減少している

また、南北 16 キロの海岸線を有する喜入町においては、豊富な海産資源に恵まれているものの、明治期から一貫して水産業は零細の状況にあった。喜入町史によれば、1898 年（明治 31）の記録では漁家戸数は 169 戸であり、その内専業戸数は、わずかに 22 戸にすぎなかった。同年の保有漁船は 309 隻であるが、1920 年（大正 9 年）には 152 隻へとさらに減少している。1935 年（昭和 10）になると動力船 35 隻、無動力船 224 隻へと増加しているものの、大規模漁業への転換が図られず、零細の状況のまま漁業従事者は減少していった（喜入町 2004）。

多くの零細農家の次男以降の若者は高度経済成長の金の卵として京阪神地区の中小工場へ働きにでかけた。また、若者に限らず、町民の主要な働き手は朝夕の送迎マイクロバスで鹿児島市へ日給月給のような労務作業に従事している状況にあった。

高度経済成長に伴う社会変化の中で狭小という地理的要因に伴い農業や水産業の大規模化などの産業変化が行われず、かつ戦後の人口増加に伴う受け皿として就労環境が地域に存在していなかったことから、高度経済成長にかけて人口は減少することとなった。この時期に喜入町は貧困状況にあった。

1966 年、喜入町の最北端に位置する瀬々串地区出身である町長川原新次郎は、地方自治体の財政力を示す財政力指数が 0.20 という町の状況を転換するために日本石油株式会社の石油備蓄基地の誘致を計画する。喜入町内において基地の誘致に対する大規模な反対運動は展開されず、喜入町において世界最大の石油備蓄基地が誕生することとなった。2019 年現在の貯蔵量 750 万 KL は世界最大規模の貯蔵量であり、備蓄基地から喜入町への経済的効果は巨大なものであった。1969 年の操業開始以降、喜入は豊かな町へと転ずる。操業後わずか 8 年となる 1977 年には財政力指数が 0.99 へと上昇し、地方交付税はゼロ査定となった。同年の徴税収支における日本石油基地関連が占める割合は 81.4%であった事からも備蓄基地と喜入町の密接な関係を捉えられる。豊富な税収をもとに、喜入町では道路や施設などのインフラが整備された。新入学する小学生への制服の無料支給や、高齢者向けの施設が開業するなど住民へのサービスが拡大する。備蓄基地の操業以降、喜入町内において、町が元々有していて村落的社会関係に接続する形で、石油備蓄基地からの利益を中心とする経済的・政治的・社会的関係が構築されたといえる。

しかし、1975 年以降基地の拡大は停止する。また、オイルショック以降エネルギー資源の原油から LNG への転換に加え、基地の固定資産税に対する減価償却が進行したことに伴い、基地から町への税収は年々減少していた。本発表で示す産廃処分場問題が生じる 1993 年直前には財政力指数、税収支ともに 5 割を切る状況にあった。税収の確保が課題となっていた喜入町は、1993 年瀬々串地区において県の産廃処分場を誘致する計画を立案する。

2. 産廃処分場誘致計画反対運動

2.1 1993 年 瀬々串における住民運動

旧喜入町の北端に位置する瀬々串地区は石油備蓄基地誘致を行った川原新次郎町長の地元であり、地縁と血縁による強固な関係が結ばれた地域であった。瀬々串は空間的に集落と住宅が密集するだけでなく、違う集落に住んでいたとしても、名字に由来する集落の青年団に加入する慣習が存在し、横断的な社会関係が存在していた。そのような地縁的背景に加え、前述した基地からの利益を中心とする経済的・政治的・社会的関係によって取り結ばれており、町役場に親しい人や親族が従事していたり、備蓄基地に親しい人や親族が従事していたりといった、備蓄基地と町と住民の利益共有関係が維持され続けていた。

そのような瀬々串の集落から離れた山間部に 1988 年に造成された振興の住宅地星和台団地が位置していた。星和台団地は民間のデベロッパーによって造成された団地ⁱであり、図 3 から示されるように、旧来からの住民が在住する集落とは離れた山間部に建設された典型的な郊外住宅地である。造成後に一斉に入居した星和台団地の住民は、入居の理由ⁱⁱとして近隣経済圏へのアクセスもよく、道路や施設などのインフラも整備されている。その上、山、海、川といった自然も豊かでかつ降灰が少なく、犯罪発生率が極めて低いといった点をあげる。しかし、星和台に居住する殆どの住民は鹿児島市内に勤務しており、旧来からの瀬々串の住民との社会関係においては、子どもたちが同じ小学校に通うといった数少ない状況を除けば、瀬々串地区の地域社会とは空間的にも社会的にも分離していた状況にあった。

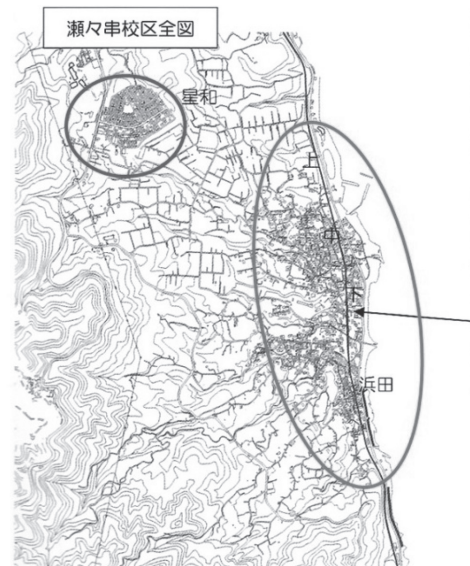


図 3 瀬々串集落地図

喜入町によって計画された県の産廃処分場の誘致計画（政策形成）は、1993 年 8 月、新聞、テレビのニュース等のメディアにより瀬々串地区の産廃処分場建設計画が報道されるといった形で（メディア報道）、地元の人びとは町による開発を知ることとなった。この事態に町と密接な関係にある瀬々串地区の旧来からの住民は明確に反対を表明しなかったが、建設予定地に隣接する星和台団地の住民は自治会を中心に反対組織を即座に結成した（大衆の反応／クレーム申し立て）。当初、星和台団地に在住する「よそ者」である新住民と瀬々串地区の旧来からの住民には産廃誘致問題に対して態度の温度差があったⁱⁱⁱ。反対運動の中心的人物であった星和台団地の住民は当時の状況について、「よそ者が何を騒いでる」と旧来からの住民に言葉にされたと証言する^{iv}。多様な職業に就き、同じ地域に住んでいる事以外に共通点の少なかった星和台団地の住民であるが、星和台団地内の集会所を起点として反対運動を展開しようとする。その中で、反対運動の拡大の必要性が検討され、旧来からの住民と共に反対運動を展開することを試みる。

産廃処分場の予定地は上述した様に、星和台団地に隣接している。しかし、旧来からの住民が在住する集落から見た場合、処分場予定地は空間的に離れた位置にある。星和台団地の反対運動家たちは、旧来からの住民と課題の共有の必要があると考えた。彼らはテレ

ビ局から公害問題を取り扱った映像資料を入手し独自に編集を行い、瀬々串の各集落でビデオを流し勉強会を開催した。その際、産廃反対運動のテーマは山間部に位置する星和台団地だけの問題ではなく、川を通じ平野部である瀬々串地区と繋がり公害が拡大する可能性が存在する。さらには、鹿児島湾全体の環境問題に繋がると繰り返し説明し、徐々に瀬々串地区全体の社会問題として運動が展開していった⁹。運動の展開の中「よそ者」とされた星和台団地の住民と伝統的な社会である旧住民の間にコミュニケーションチャンネルが形成された。反対運動の事務局は星和台団地の集会所から瀬々串地区の公民館に移転され、反対運動は組織化され大規模に展開した。反対運動の中心的人物は星和台団地の住人が担い、旧来からの住民の町内会、婦人会、青年団が反対同盟に加入した。瀬々串地区出身の町議会議員に働きかけ、町役場に連日陳情を行った（社会問題ワーク）。8月に知られることとなった産業廃棄物処分場誘致計画は、年末には計画遂行が膠着状態になり、翌年には町により開発計画は撤回されることとなった（政策の影響）。

2.2 1994年 生見における住民運動

旧喜入町の南端に位置する生見地区は喜入町町最南端に位置している。地縁、血縁に基づく社会関係は濃厚だが、瀬々串地区の空間的状況とは異なり集落は分散しており、集落間の空間的分離、意識的分離を捉える事ができる。

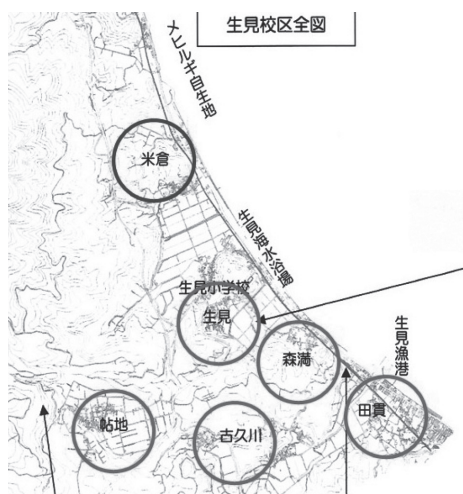


図4 生見集落地図

瀬々串における産廃処分場誘致計画は1993年末には膠着状況にあったが、喜入町は生見地区に産廃処分場を誘致する事を計画する（政策形成）。1994年の1月に入り、生見の主婦たちの噂話で生見における産廃処分場建設計画が話題になるも、町などからの明確な発表がないなかで、主婦や夫たちは、態度を保留する（大衆の反応）。2月に入り、喜入町議会の議長経験者である生見公民館長が婦人会の集まりの場で、生見地区における産廃処分場誘致計画を発表し、のちに各集落長も誘致計画に賛意を示す。海水浴場を管理する生見観光協会のメンバーは、この発表に対し意義申し立てを行おうとするも、社会運動に対するノウハウを有していなかった為に、すでに運動を展開していた瀬々串の反対運動グループに接続することで反対運動グループ「生見の子供と自然を守る会」を結成し反対運動を展開する（クレーム申し立て）。その際に、スローガンとして用いられたのは「自然はみんなの財産であり 自然を壊したり 将来子供たちや住民の健康を脅かす産業廃棄物処分場建設に反対する」というものであった。しかし、反対運動の初期において生見の婦人会、PTA、漁協などは態度を保留していた。この背景には、当時のPTA会長が町の職員であったことや、漁協は備蓄基地誘致に際し莫大な補償金を得ており、基地と町と住民の間の密接な関係が生見においても存在していた事が示される。しかし、メディアによる報道の中で、誘致派が別名義で集めた署名を誘致嘆願として提出していたことが明らかになる（メディア報道）。反対派は集落の各戸を訪ね、反対署名を集める。3月に入り誘致派代表の公民館長は辞任し、反対派代表が新公民館長に就任した。また、それまで話し合いで承認されていた集落長だったが、住民達により各集落の選挙が行われ、反対派のメンバーが新集落長に就任し反対運動の拡大が行われた。これらの動きの中、婦人会、PTA、漁協も反対の意思を表明し、反対運動同盟へと加入することとなった。5月に入り誘致派は建設予定地の地権者から土地を買い取り、誘致計画の妨害が目指された（社会問題ワーク）が、6月には町長による計画断念が表明された（政策の影響）。

3. 分析

前節に示した事例について、本節では分析枠組みである「社会問題の構築主義」の観点から「社会問題過程」「レトリック」について分析を行う。

3.1 社会運動過程

喜入における産廃処分場誘致計画の反対運動は瀬々串の事例と生見の事例において異なる社会運動過程を捉えることができる。

瀬々串は「政策形成」→「メディア報道」→「大衆の反応」→「クレーム申し立て」→「社会問題ワーク」→「政策の影響」というプロセスであり、生見は「政策形成」→「大衆の反応」→「クレーム申し立て」→「メディア報道」→「社会問題ワーク」→「政策の影響」というプロセスである。いずれも、従来の「クレーム申し立て」を最初期に位置付ける自然史モデルとは異なるプロセスであり、第1節で示した赤川による自然史モデルの修正と「政策形成」の先行といった我が国固有の社会問題過程と重なる状況を捉える事ができる。

しかし、ここで注目したいのは、社会問題過程において他の社会問題過程が接続している状況である。より具体的に述べるならば、瀬々串の「社会問題ワーク」が生見の「クレーム申し立て」に接続している点である。換言するならば、瀬々串の反対運動が存在しなければ、生見において反対運動が展開しなかったという事である。筆者は別稿にて社会問題過程において、「クレームの申し立て」がどのように行われるのか検討を行った。その中で、自然史モデルに位置付いていない、マクロ・メゾ・ミクロの「社会的状況」が接続することで、「クレーム申し立て」が成立するというプロセスについて明らかにした。本事例からは、「クレーム申し立て」と「社会的状況」の接続のみならず、「クレーム申し立て」以外のプロセスへ他の社会運動や社会運動過程のプロセスが接続するという可能性を捉える事ができる。既往の構築主義のアプローチでは社会問題過程の「比較」については視野に置かれていないものの、本事例からは「接続」についての検討といった新たな分析の可能性が示された。本知見からは、異なる

社会運動や社会運動のプロセスと接続することにより、社会運動が成立する可能性が推察される。

3.2 レトリック

中河（1999）はレトリックのイデオロムについて、以下の5つの分類を行っている。望ましい状態や価値が喪失の危機にさらされているという「喪失のレトリック」。人権や権利という価値に依拠するレトリックである「権利のレトリック」。人びとの健康や身体の安全が危険にさらされるということを提示する「危険のレトリック」。本当のことを知らされていない人や、「洗脳」されたり、騙されている人は、有害な影響力が行使されることを認識できない「犠牲者」で、望ましい行為を選択できていないという「没理性のレトリック」。そして、考えも及ばないような大規模な災害が起きるとする「災害のレトリック」である。

瀬々串の事例からは、錦江湾を守れという「喪失のレトリック」、川を通じて海へ、公害、ダイオキシンについて言及した「危険のレトリック」。磯焼け問題が無視されているという「没理性のレトリック」や「災害のレトリック」を読み取る事ができる。瀬々串のレトリックからは、住民の個人化という傾向を捉える事ができる星和台を起点とし、空間的認識と重なる形で反対運動に接続・展開する戦略を捉える事ができる。このレトリックに基づき星和台の住民に代表される個人化の傾向にあった人びとはインフォーマルネットワークへと接続し、瀬々串集落の旧来の住民と接続することでフォーマルなネットワークへととなり、反対運動を拡大していったと考えられる。その際、イメージされるものの抽象度は高い。反対同盟のスローガンには「自然を守り喜び入る町をつくろう」といったものであり、「自然」や「喜び」といった、アクター個人毎に異なるイメージが想起されるものを使用し、多様なアクターを包摂している。また敵対者のイメージについての抽象性も高い。敵対者として設定されているのは「喜入町」という行政組織であり、建設計画を主導する鹿児島県や町長個人は対象とされていない。相対的に町行政との関係が濃厚な瀬々串の状況に応じた戦略と考えられる。

では、生見の事例からはどのような点が読み取る事ができるのだろうか。「喪失のレトリック」としては天然記念物のマングローブ、観光客、子どもたちが示され、「危険のレトリック」では公害、ダイオキシン、奇形児が語られる。「権利のレトリック」として自然はみんなの財産、生存権、選挙。「没理性のレトリック」として誘致署名の偽造問題が語られる。生見のレトリックの事例からは、瀬々串に比べてレトリックの多様性、抽象度の低さが特徴的に読み取れる。特に注目したいのは敵対者として釜付健次郎町長と公民館長が名指しで糾弾されている事である。誘致派であった町長や公民館長、そして集落長たちは生見の人びとに承認された人びとであった。しかし、それらのフォーマルな人びとに騙されていた、裏切られていたという事をレトリックに織り込むことで、インフォーマルであった反対派のアクターは正当性を獲得し、フォーマルへと転じ反対運動を成立させたと考えられる。

最後に、検討したいのはレトリックに見られる時制の問題である。既往のレトリック分析からは時制に関する検討は行われていないが、喜入の事例から時制に関する検討の余地が示される。瀬々串と生見に共通する事例としては「未来についてのレトリック」と「現在についてのレトリック」を捉える事ができる。「未来についてのレトリック」とは、環境保護や子どもたちの未来について言及がなされている、今後想定される（喪失しうる）ものを対象としたレトリックとして捉える事ができる。中河の分類からは、喪失のレトリック、危険のレトリック、災厄のレトリックを当てはめる事ができる。「現在についてのレトリック」とは生存権の問題や騙されているといった、現段階において発生している事に対する言及を捉えられる。中河の分類からは、権利のレトリック、没理性のレトリックを分類できる。本事例には見られなかったが、現時点において健康被害が生じている場合などは、危険のレトリックなども分類可能であると考えられる。そして、生見においてのみ捉えられる「過去についてのレトリック」が存在する。生見の反対運動のビラには「二十年も冷や飯喰わして、こんどは泥靴で生見地区民を踏み潰し息の音も止めるのか、我々にも赤い血が流れて

いる」という特徴的な文言を見ることができる。ここに記述される「二十年」という歳月は備蓄基地からの恩恵が示されており、恩恵の周縁に置かれた生見ならではの地位的状況を踏まえたレトリックとして捉えられる。中河の分類におけるレトリックはこの位相に該当するものは見られないものの、特定の地域、時代などに存在する「社会的状況」が地域課題としての社会問題運動の重要なファクターとなり得ることが推察される。

4. おわりに

本発表では社会運動過程における「レトリック」に着目し、住民のネットワーク的連帯が展開し、地域における社会問題がどのように成立したのかを明らかにする事を試みた。この作業の中で、社会運動過程の分析から、異なる社会運動と接続すること、そして異なる社会運動過程と接続することの可能性を示した。また、レトリックの分析からは、レトリックの抽象性、レトリックの対象、レトリックの時制といった戦略的展開の可能性について示した。

最後に今後の課題について二点述べる。まず、以上に示した知見が、現代の地域課題と人びとの乖離という問題について適応可能かという点である。本発表で示した1993年と現在では、人びとの個人化についての状況も異なり、また情報通信技術の発達に伴う繋がりについての状況も異なり、更なる検討の余地が存在する。二点目としては、「語られないレトリック」の問題である。構築主義の分析は語られたレトリックに基づくが、「敢えて語らない」といった状況も存在する事が想定可能となる。この事は、本分析の抽象性の要素の延長線上に存在すると考えられる。「語られない」事を構築主義に位置付ける事への課題についても検討の余地が存在する。以上については別稿で論じたい。

-
- i 瀬々串産廃処分場反対同盟元幹部のインタビューから。
 - ii 瀬々串産廃処分場反対同盟元幹部，元喜入町役場職員のインタビューから。
 - iii 開発計画の星和台団地の住民と，旧来からの瀬々串地区の住民の温度差については，瀬々串産廃処分場反対同盟元幹部，元喜入町役場職員，喜入町元町議のインタビューからも示された。
 - iv 瀬々串産廃処分場反対同盟元幹部のインタビューから。
 - v 瀬々串産廃処分場反対同盟元幹部，喜入町喜入地区公民館長のインタビューから。

参考文献

- 赤川学，2012，『社会問題の社会学』弘文堂。
- ，2013，「社会問題のサイクルと経路依存性——「非実在青少年」規制をめぐる」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』頸草書房。
- Blumer, Herbert George, 1971, Social Problems as Collective Behavior Social Problems, 18(3): 298-306. (=2006, 桑原司・山口健一訳「集合行動としての社会問題」『経済学論集』66: 41-55.)
- 大臣官房統計部経営・構造統計課センサス統計室，2015，『農林業センサス報告書』農林水産省。
- 喜入町郷土誌編集委員会，2004，『喜入町郷土誌 増補改訂版』喜入町。
- 喜入町総務課編，1986，『広報きいれ：喜入町制施行30周年記念・縮刷版』喜入町。
- 中河伸俊，1999，『社会問題の社会学』世界思想社。
- 日本石油基地株式会社喜入基地編，1988，『喜入基地20年のあゆみ』日本石油基地株式会社。
- 小熊英二，2016，「波が寄せれば岩は沈む——福島原発事故後における社会運動の社会学的分析」『現代思想』青土社 44(7)：206-233。
- 資源エネルギー庁，2017，『平成28年度エネルギーに関する年次報告(エネルギー白書2017)』経済産業省。
- 総務省統計局，1950，「昭和25年国勢調査」，総務省。
- ，1970，「昭和45年国勢調査」，総務省。
- ，2015，「平成27年国勢調査」，総務省。
- ，2018，『住民基本台帳人口移動報告』，総務省。
- Spector, M. & J. I. Kitsuse, 1977, Construgting Social Problems, Menlo Park. (=1990, 村上直之ほか訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社。)
- 運輸省港湾局開発課，1977，『港湾開発効果調査報告書——喜入港（原油CTA基地）の場合』運輸省。
- 吉原直樹，2013，「ポスト3・11の地層から——いまコミュニティを問うことの意味」『コミュニティを再考する』平凡社。

韓国の兵役における個人の人間関係とその動向

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース
山下 慶

はじめに

本研究は、韓国における国防の義務である兵役を終えた大学生を中心に、軍隊内で得た経験に基づく人間関係について検討することが目的である。特に、フォーマルとインフォーマルの視点に着目し、多様な位相における2年間の軍隊での生活期間中と、その後である転役後の「会う」「会わない」という事実の相関性について分析する。

韓国の男性にとって兵役というのは、多くの男性が必ず経験するものであるため、人生において無視することができない存在である。約2年間の兵役は、男性に愛国心を涵養させるだけではなく、同時に彼らに心身ともに困難や負担を与えることで国民の一体感、連帯感、親近感を形成するという役割をかつてより担ってきた。また特殊な目的を持つ組織である軍隊においては、日常的な社会空間から情緒的、心理的に分離され、統制・規制されながら既存の価値観や生活態度の変化を強要し、新たな価値観や規範が形成され内面化されるという再社会化が行われてきた[春木 2000]。そのため、軍隊は現実の社会とは全く異なる独立した「小さな社会」であると彼らに捉えられており、実生活とは異なる環境を作り出している。

その異なる環境下に置かれつつ、軍隊という特性上、大きな集団によって外の世界と同様、またそれ以上に強固な人間関係が形成される。軍隊内には様々な位相の人物が存在しており、フォーマルとしての人間関係、インフォーマルとしての人間関係が複雑に絡みあって形成されている。また、それだけではなく、約2年間の兵役生活を終え転役したとしても、軍隊という社会で得た関係が存在していた事実は消えることはない。そのため、軍隊内で得た人間関係が韓国人男性の対人

関係に何かしらの影響を及ぼしている可能性は否定できない。

しかしながら、韓国における兵役にまつわる研究というのはジェンダーに関する研究や、軍隊が個人に与える影響に関する研究が多く、軍隊内の人間関係に着目した内容や、軍隊を転役してからの人間関係についての研究内容というのは詳しくは明らかとなっていない。

よって、本研究は韓国人男性の対人関係を明らかにする第一歩として、インタビュー調査によって現代における韓国の兵役を経験した男子、特に軍隊内のフォーマルとインフォーマルの人間関係がどのような要素によって構成されているのか、更にその要素が転役後に軍隊で知り合った人と「会う」「会わない」という事実に、どのような関わりがあるのかを明らかにする。

また、本研究で軍隊を取り扱う理由としては、上記で述べたとおり、軍隊内で得た人間関係が韓国人男性の対人関係に何かしらの影響を及ぼしている可能性は十分に考えられ、韓国社会の文化や特徴を知る手掛かりとなるためである。そのため、対人関係を知るためには本来であれば入隊前・軍隊内・転役後という長期にわたっての調査が必要となるが、今回は軍隊内を重点に調査・記述を行うこととする。

従来の韓国の軍隊研究

韓国の軍隊に関する研究は1987年に起こった民主化が90年代に徐々に浸透していく中で初めて行えた研究であり、まだ歴史としては浅い。そのような研究ではあるが、朴眞煥が指摘するには、韓国社会の軍隊に関する文献・資料等の傾向としては2つの傾向がみ

られるという。それは、①政治学や社会学的研究を中心とする社会制度や組織としての軍隊研究、②軍隊とジェンダー規範との関係を中心とする研究の2点である。

- ① の政治学的、社会学的研究は軍人による研究が多いため、軍隊の政策を明らかにすること、軍隊の必要性や正当性を主張している傾向にある。
- ② の軍隊とジェンダー規範との関係を中心とする研究では、女性の立場を中心に議論を行い、男性中心の軍隊や軍事文化が女性に様々な被害を与えたことを明らかにしたとしている[朴 2008]。

このような傾向がある韓国の軍隊に関する研究の中で、軍隊が韓国人男性に与える研究を行ってきた日本の先駆者としては、社会学者の春木育美が挙げられる。春木は、伝統的に韓国社会で見られる協同心、集団意識、義理、序列意識等の文化的特性が、軍組織の特性と相乗作用を起こすことにより、韓国の男性の意識により深く内在化されることを明らかにした[春木 2000]。

また韓国の軍事文化とジェンダーに関する研究を行っている研究者としては、文化人類学者の佐々木正徳が挙げられる。佐々木は代替服務の立場に着目し、兵役がもたらす男性性の多様性だけでなく[佐々木 2013]、軍隊という存在の傍で寄り添う女性性におけるジェンダー秩序の形態を明らかにした[佐々木 2014]。

以上の春木の研究と佐々木の研究に代表されるように、韓国における軍隊研究は、兵役が男性個人に与える影響と、その周辺の人物に与える影響に関する内容が非常に多い。また、朴が指摘するように、これまでの研究では軍組織、つまりフォーマルな関係に関する文献が多く、得に軍隊内においてどのような過程、またどのような要因によってインフォーマルな関係が形成されるのかを記述した文献はあまり見受けられない。よって本研究では事例を基に、軍隊内で得ることが出来るフォーマルな関係とインフォーマルな関係に関する分類を行い、特にどのような要素によってそれぞれが成り立っているのか特にインフォーマルな関係に着目し考察している。

兵役におけるフォーマルとインフォーマル

ここでは、兵役に関して想定される軍隊にまつわるフォーマルな関係とインフォーマルな関係について定義する。

社会学において、フォーマルな関係とインフォーマルな関係というのは、フォーマル組織とインフォーマル・グループという対概念として表現されている。

フォーマル組織というのは、地位や立場に規定される機能的関係の集団のことであり、一方、インフォーマル・グループというのは、人格や感情によって自然発生的に生じたもので、相互的関係を持った集団のことを示す。

このことを受け、軍隊におけるフォーマルな関係を定義した場合、軍や国家で規定された業務・規則・生活・行事等を遂行する場合に付属する地位や立場等によって結ばれる関係が該当する。例えば部隊内の職務を遂行するために与えられた地位や役割、また同室内での先輩・後輩等の関係等が挙げられる。更に、軍隊というのは国家が規定したフォーマルな関係である。そのため、軍隊に入隊した男性であれば全員フォーマルな関係を持つこととなる。

また、軍隊におけるインフォーマルな関係というのは、軍や国家で規定された集団ではなく、上記で示した通り感情に基づいた人と人の相互関係によって結ばれた関係のことである。更に、インフォーマルの有無に関しては人によって異なることが想定される。

韓国における兵役の概要

兵役というのは韓国の男性であれば、19歳になる年に徴兵検査を受け、特別な理由（健康の不具合、オリンピック選手など優秀な人材である等）がない限り

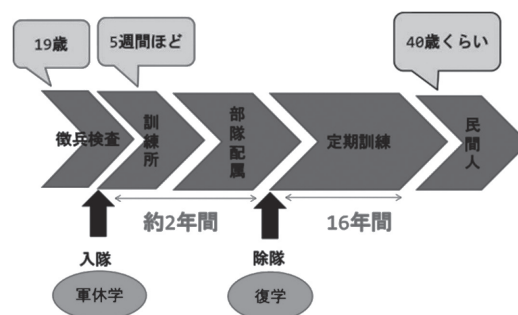


図1 兵役の流れ

20～30歳の間に約2年間の兵役につく義務のことである。軍隊に入隊する入り口となる徴兵検査では、身体検査に加え、人格検査、適性検査など多角的に行われ、過去の病歴や犯罪歴なども調査対象項目となる。結果によって対象者は身体等級1～6級に分類され、それぞれの部隊に配属される[尹 2004：vi]。多くの男性は大学在学中、特に大学1年生終了時に入隊するケースが多く、軍隊に入隊する学生は軍休学というもの取得することが一般的である。大学1年生修了時に軍隊に行く男性が多い理由としては、軍隊の中では出身地や、年齢、軍隊外の階級は関係なく、入隊した順に上下関係が発生することがその理由となりうる。

「現役」としての2年間の軍隊生活を終えたのちは「転役」である予備役になり、定期的に訓練に参加することが義務付けられている。また、転役した翌年から16年経過すると晴れて「除隊」をする退役軍人となるのである。

部隊の種類としては、陸軍・海軍・空軍・海兵隊員・義務警察・海洋警察・義務消防・常勤予備軍・社会服務要員、公益勤務要員等がある。各兵士が所属する部隊は仕事内容や勤続期間も異なり、またそれに加えそれぞれの仕事内容はさらに細分化されている。

韓国における軍隊の組織

韓国軍は陸軍・海軍・空軍で構成され、国民の安全保障と領土保全、また国民の主権保護のために、外部からの侵略を抑制し、防衛する任務を担っている。

軍の最高統帥権は大統領であり、大統領の委任を受けた範囲内で国防部長官が軍を指揮する。国防部の下

には合同参謀本部、陸軍本部、海軍本部、空軍本部が編成されており、特に合同参謀本部は陸・海・空軍本部の上位にある。

陸軍は陸軍本部と3個軍司令部、航空作戦司令部、特殊線司令部とこれを支援する部隊で編成されている。また海軍は海軍本部と作戦司令部、および海兵隊司令部とこれを支援する部隊で編成されている。空軍は、空軍本部と作戦司令部、およびこれを支援する司令部で編成されている。

兵役に関する階級に関しては、上から兵長・上等兵・一等兵・二等兵という順となる。軍人の序列はこのような階級の順によるが、職業軍人の階級も合わせればより多くまた細分化される[尹 2004：124]。

事例研究

本研究のインフォーマントは、大韓民国江原道江陵市に在住している学生6名と、全羅北道全州市に在住している学生3名である。両地域の方角は北と南に位置しているが、全国各地から1つの部隊に現役兵が集まるため、体験の地域差による影響は極めて少ないと考える。また、インフォーマントが在籍する大学の学力や規模にも大きな差がないことから、各インフォーマントの属性が極端に異なることを避けている。更に、本調査では軍隊内で生活をする部隊に勤務したインフォーマントに限定して記載するものとする。

調査方法としては、現地に赴き行ったインタビュー調査と、電話調査、メール調査等である。

記載方法としては、インフォーマントの語りを基に①軍隊におけるフォーマルな関係はどのような要素によって構成されているか。また、②インフォーマルな関係はどのような要素によって構成されているか。そして、③①、②に見られる関係性にはどのようなものがあるか。また、転役後の「会う」「会わない」という事実にはどのような関わりがあるか。

また以下の表は本調査におけるインフォーマントの基本情報である。表中に記載されている年齢であるが、韓国では日本とは異なる年齢の数え方を行うため混乱を招かないように西暦での記載を推奨した。この中で

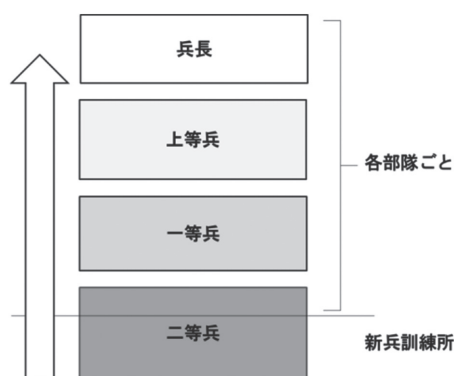


図2 兵役の階級

表 1 本調査におけるインフォーマントの基本情報

IF	生まれ年	入隊時期	部隊や仕事内容等
A	1991	大学 1 年生終了時	陸軍・砲兵・自走砲の運転や整備
B	1995	大学 2 年生途中	陸軍・歩兵・機関銃兵
C	1993	大学 1 年生終了時	海兵隊・搜索隊・戦争を想定した実践的訓練
D	1993	大学入学直後	陸軍・装甲車の運転や管理
E	1994	大学 2 年生途中	陸軍・歩兵・教生として現役の指導や管理
F	1993	大学 2 年生途中	陸軍・地雷撤去の特別要員
G	1994	大学 1 年生終了時	陸軍・海岸の警備
H	1994	大学 2 年生終了時	陸軍・トラックの運転
I	1992	大学 1 年生終了時	陸軍・歩兵

も先ほど提示した①、②、③の内容により関係性が深いインフォーマント C、D、H の 3 人の事例をまず先に紹介し、その後に①、②、③の分類を行う。

事例紹介

・インフォーマント C

C は 1993 年生まれで海兵隊の搜索隊に所属していた。海兵隊というのは志願兵であり、兵役の中でも最も厳しい試験を受け合格した者だけがなれる志願兵である。C はその海兵隊の中でも上位 1% しか所属することができない搜索隊であり、他のインフォーマントとは異なる経験や考えを持っていた。

C が言うには、海兵隊というのは精神力が強く何をしても逃げ出さない積極性を持っているという特徴があり、その意思というのは後輩にも引き継がれるという。特に仲間に対する意識というのは他の現役兵と比較すると格段に異なる。

C が述べるには、海兵隊に入隊すると「仲間とは家族である」と軍から教育されるという。戦争を想定した非常に厳しい訓練を乗り越えるためには自身の命を預けられる仲間が必要であるため、同じ班の仲間を「家族」とあると考えなければならないことがその理由となる。しかし、家族になるためには思うだけではなく、数ある試練を乗り越えなければならない。試験に合格し入隊すると、新兵は第一次訓練を受ける。その訓練により搜索隊に残るもの・やめるものにわかれ、残ったものは第二次訓練を受けることとなる。そして、晴

れて搜索隊の「家族」となる事ができる。

精鋭部隊の搜索隊の訓練というのはどれも厳しいものであるが、最も厳しいのは「地獄の一週間」という訓練である。この訓練は忍耐力を確認する訓練であり、1 チーム 7 人で大きなボートを頭の上で抱えたまま、各地にあるポイントに歩き続けるというものである。トイレや食事自分勝手に行くことはできず、何よりも兵士を苦しめるのは一週間寝ることができないということである。3 日目には体は動くが脳が動いていない状態になり、ひどい人では幻覚を見る人もいる。心身ともに限界を迎えた兵士たちは幹部や教官に対し罵声を浴びせるもの、暴力的になるものがあるが、苦しみを理解することができる幹部たちは誰一人として怒るものはいないという。

このように、試練を乗り越え擬制的な家族として海兵隊の搜索隊は非常に強固な人間関係で結びついており、転役した現在も頻繁に交流も結んでいる。

・インフォーマント D

インフォーマント D は 1993 年生まれで、陸軍で装甲車の運転を行う職務についていた。D は元来非常にスポーツが好きな活発な性格であるため、軍隊内で運動をしたことが非常に印象に残っていると語った。実は限られた娯楽しかない軍隊においてサッカーやバスケット、バドミントン等のスポーツで遊ぶことは、現役兵において非常に貴重な遊びの一つであり、一般的にそのことはネット上でも有名なエピソードのひとつでも

ある。D も例外ではなく、時間があれば部隊の同期や先輩たちと運動することが楽しかったという。

初めのうちは、階級の上の先輩が後輩を誘うことでスポーツチームを作り、またそこから休憩中の飲食を通して自然と交流することが可能になったという。そのことで、スポーツを率先して行っている人は、個々人で過ごしている人よりも周囲の人間とかかわりを持っているため、悪い行いをしても怒られることがなく個人間で優遇される傾向にあるようだ。

また、スポーツを行っていることで軍隊内におけるカーストの上位に位置付けられやすいとも語られた。チーム編成については、それぞれの部隊ごとにグラウンドが設置されているものの、部隊を越えて気が合う人や上手な人をチームに引き込んで構成し、娯楽としてだけではなく、軍隊のスポーツ大会に向けて練習を積み重ねるのである。

・インフォーマント H

インフォーマント H は 1994 年生まれで、陸軍でトラックの運転を行う業務に従事していた。H の仕事の特徴としては、通常業務に加え遠方に運搬の作業があるときは夜までかかることもあり、帰ってきたら友達と会うことが可能であるが一般的な現役兵より周囲との関りが薄くなるというものである。しかしながら、2 人、3 人を 1 組としトラックに乗り込むため、密室でまた少人数で会話をしたため共に行動した同期とは仲が深まりやすかったという。また、業務時間外も同期とカラオケやパソコンをしたり、0 軍隊のコンビニである PX でお菓子を買って食べたり、スポーツをして交流を楽しんだ。

H は夜の勤務として 1 週間毎日 1 時間警備をするという仕事を行っており、これは 1 週間やり遂げると続けて後の 2 週間は担当が回ってこないが、2 人で行う仕事であったため非常に会話が弾んだという。以上のことから H が一般の兵士よりも少人数でかつその数人の空間だけで交流を深め深い話まで踏み込みやすかったことが分かる。

そのため転役後、居住地域にばらつきがあるものの軍隊仲間とできるだけ連絡を取り合い、旅行にも行くことがあったという。しかし、この関係性の深さは同

期に特化したものであり、先輩や後輩とは仲良くなることはなかった。

以上が、特徴的なインフォーマントの事例紹介である。以下からは、先ほども提示した①、②、③にそれぞれ分類した具体的な内容である。

事例における分類

① 軍隊内においてフォーマルを規定する要素

ここからは、①フォーマルな関係はどのような要素によって構成されているかという内容に関して分析を行いたい。①の内容に当てはまる要素は 3 点ある。

また、軍隊内におけるフォーマルな関係というのは、軍や国家で規定された業務・規則等を遂行するための地位や立場であり、軍隊に所属している限りフォーマルな関係が存在しないということは考えられない。

B は、兵役時代に知り合った同年齢の先輩に、軍隊内では敬語で会話を行っていたが、転役後は敬語を使用しなくなったという。また G も同様、軍隊内において軍隊独特な硬い言葉遣いを使用していた。以上のことから、軍隊内におけるフォーマルな関係では、自身より上位の人物に対して「敬語」や軍隊特有の硬い「言葉遣い」を強いられる。

次に想定されるフォーマルの要素としては、「従属性」「権威主義」である。

E は現役兵を指導・監視を行う教生という職務に就いており、自殺未遂や精神的に非常に病んでいる現役兵の指導に悩み苦しんでいた。E は幹部とともに助けようと奮闘したが、国家に取り合ってもらえなかったという。

また I は、自身の部隊内で先輩によるいじめを経験していた。休憩時間に行うスポーツにも強制的に参加させられ、同期と話すことさえも禁じられていた。また、同期が失敗するたびに連帯責任を負わされていた。

更に、志願兵である海兵隊の中でも 1% の人材しかなくなることが出来ない捜索隊に所属していた C は、軍に「私たちは家族である」と教育させられており、そ

の教えを信じ厳しい訓練を耐え抜いてきたと語った。

以上のことから、軍隊内におけるフォーマルな関係では強制的、また理不尽な扱いを受けたとしても、本人たちの意識は関係なく、自身より上位の人物に従属しなければならない。そのため、フォーマルな関係において低位のものから要求・反発するということは軍隊内ではほぼ考えられないといえる。

最後のフォーマルの要素としては「優遇措置」である。

Fは特別プロジェクトの要員として、北朝鮮との国境に埋められた地雷撤去を行っていた。この仕事は非常に危険な仕事であったため、軍隊生活上免除されることが多く¹、そのことに魅力を感じFは引き受けたという。

以上のことから、軍隊内におけるフォーマルな関係では兵士のフォーマルとしての立場や役割を確立させるために、強制的になるだけではなく必要な場合、特に職務の危険性に応じて、優遇措置を取ることを推奨しているのである。

② 軍隊内においてインフォーマルを規定する要素

ここからは、②インフォーマルな関係はどのような要素によって構成されているか。について分析を行う。
②に当てはまる要素も3点ある。

軍隊におけるインフォーマルな関係というのは、軍や国家で規定された集団ではなく、感情に基づいた人と人の相互関係によって結ばれた関係のことである。よって、ここでは軍隊内におけるインフォーマルな関係の有無や人と人との相互関係を規定する要素を、事例を基に整理する。

Aは軍隊の中では、面白い話題を持っていればその兵士というのは先輩に気に入られ、より仲良くしてもらうことが出来ると語る。特に警備の仕事では、2時間ほど建物の前で立ち続けなければならない業務であるため、自身の面白い話を披露させられる。しかしながら、Aは先輩の要求にうまく答えることが出来

なかったため、叱られるという経験があった。

また、同様にBも面白い話題を持っている人は先輩から人気者になりやすいと語っている。しかしながら、本人は面白い話をする事が出来なかったため、先輩との関りは薄かった。

以上のことから、軍隊内におけるインフォーマルな関係において「面白さ」という要素が重要視される場合があると想定できる。

次の要素を検証する場合、再度Bを例にとる。Bは求められた際「面白さ」という要素はなかったが、その代り軍事作業を卒なくこなし、なおかつ最上級の位となったときでも他の兵士のように怠けることなく一生懸命作業を行った。その影響か、職業軍人である幹部や現役兵の後輩たちから非常に慕われたという経験があった。

また、Cは海兵隊員として何事にも積極的に取り組み、戦争を想定した訓練に命を懸けて臨んでいたという。そのような日々の取り組みとあらゆる試練を乗り越えて、軍隊仲間として軍に規定された家族になるのではなく、自分の命を預けて信頼できる家族となっていくと語った。

以上のことから、軍隊内におけるインフォーマルな関係において、「真面目さ」や「真摯さ」という要素が重要視される場合があると想定できる。

最後に、インフォーマルの関係を築く要素として挙げられるのは体験の「共感」「共有」である。

Cは海兵隊での訓練において最も苦しかった訓練として地獄の一週間と呼ばれる体力訓練であったと答えた。その訓練で最も過酷なのは1週間寝ることを禁止されることであり、3日目には幻覚を見る者や、幹部や教官に対し悪口や横暴な態度を取る者も出るという。しかしながら、幹部たちは何も言わずその兵士たちの様子を見守るという。理由としては、幹部たちもかつてより同じ経験をしたことがあり、心情を共有することが出来るためであるからだとCは語った。

またDは、軍隊内において様々な位相の人物たちとスポーツを通して交流を行った経験がある。はじめのうちは先輩が後輩を誘いスポーツチームを編成する

¹ 起床してから必ず参加しなければならない朝礼の免除や、休憩時間の延長等が当てはまる。

の다가よりうまくプレイできる兵士は他チームに引き抜かれることもあるという。スポーツを行ってれば、訓練中も個人間で優遇されることもあり、インフォーマルとしての関係のカーストの上位に位置づけることが出来るという。

次に、F は地雷撤去という非常に神経をする減らす作業に従事していたため、同期以外の位相の人物たちとは関りを持たなかったが、同期同士で先輩や作業の悪口をし、共通の会話を通して仲をより深めた。

H はトラックの運転を行う業務に従事していたが、3 人ほどの同期のグループで車に乗り込み長時間共に過ごすことが非常に多かった。トラックの中では、自身の過去から今後の展望まで、個人の深部にかかわるような話題を展開したため、兵役が終わるころにはお互いのことを熟知した存在となっていた。

以上のことから、軍隊内におけるインフォーマルな関係において、体験の「共感」「共有」という要素が重要視される場合があると想定できる。

③ ①、②に見られる関係性。また、転役後の「会う」「会わない」という事実への関わり

ここからは、③の①、②に見られる関係性にはどのようなものがあるか。また、特に②の要素は転役後の「会う」「会わない」という事実にはどのような関わりがあるか。について分析を行う。

まずは、①、②に見られる関係性である。

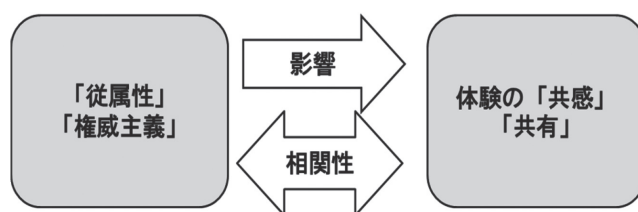


図3 ①、②との関わり

それは体験の「共感」「共有」の要素と、フォーマルの「従属性」「権威主義」の要素の関係性である。

インフォーマント F や H の様に、軍隊というフォーマルな組織での日々の辛さを会話や悪口を通して「共感」することもあれば、従わなければならない業務から得る体験の「共有」によって、フォーマルという「従属性」「権威主義」はインフォーマルである体験の「共感」「共有」に影響を及ぼしているということが分かった。

また時折、同じ体験の「共感」「共有」を行うことで、C や D のようにフォーマル・インフォーマルが相互に関連しあって異なる位相の人物にフォーマルの場面で優遇されることがある可能性を見出した。

また、転役後の「会う」「会わない」という事実に関し、②の要素はどのような関わりがあるかという問いに関して以下で分析する。

下記にある表2は、インフォーマントごとの転役後に会う人の属性や頻度をまとめた表である。

表から見て取れるようにインフォーマル A と G は転役後に軍隊の仲間と関わりあいがないことが分か

表2 本調査におけるインフォーマントごとの転役後の人間関係

If	転役後に軍隊仲間と会うか否か	誰と会うか	頻度
A	×	/	/
B	○	同期・先輩	毎日、1年に1回以上
C	○	同期・先輩・後輩	同窓会であると1年に2回、仲の良い人はそれ以上にあう
D	○	同期	1年～2年おき
E	○	幹部	半年～1年おき
F	○	同期・友人	半年～1年おき
G	×	/	/
H	○	同期	1年～2年おき
I	○	後輩	半年～1年おき

る。この2人のインフォーマントのエピソードを基に転役後の関係について考えてみる。

Aは、砲兵としての職業軍人が足りずその地位を補うため軍の命令により朝から晩まで砲についての勉強を行った。そのため、周囲と共に得る苦労を経験したのではなく、個人で得る苦労のみを経験したと語る。つまり、体験の「共感」「共有」がないのである。

一方、Gにとって軍隊内で楽しかったことといえば、同期とお菓子を食ふことや映画を見たことだと回答した。しかし、Gは一緒に過ごしていても実際に親しいとは限らないと語っている。その理由として、約2年間の軍隊生活を無事に終わらせたいという思いを持っていたため、必要以上の交流や体験を行っていなかったからである。つまり、長時間による体験の「共有」がなかったということと、感情の「共感」という要素が欠落していたのである。

おわりに

本研究では、インタビュー調査によって現代における韓国の兵役を経験した男子、特に軍隊内のインフォーマルな関係がどのような要素によって構成されているのかを、フォーマルな関係における要素とともに明らかにすることを目的とする。またその要素が転役後に軍隊で知り合った人と「会う」「会わない」という事実、どのような関わりがあるのかを明らかにした。

本論での主要な論点を簡単に振り返ってみると、以下のように整理できるであろう。

- 1) 軍隊内におけるフォーマルな関係において重要視される要素は、「言葉遣い」「従属性」「権利主義」「優遇措置」である。
- 2) 軍隊内におけるインフォーマルな関係において重要視される要素は、「面白さ」「真面目さ」また体験の「共感」「共有」である。
- 3) フォーマルな関係とインフォーマルな関係の要素の中でも、「従属性」「権威主義」というフォーマルの要素と、体験の「共感」「共有」というイ

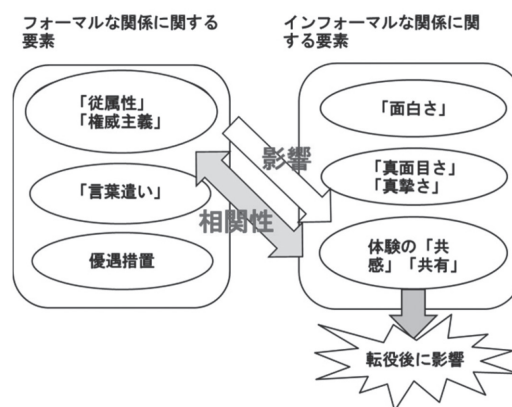


図3 軍隊の人間関係を構成する要素とその関係性

ンフォーマルの要素から影響することが多く、時としては相関性をもたらすことがある。

- 4) 転役後に軍隊仲間と「会う」「会わない」という行動は、体験の「共感」「共有」の有無に決定する。しかしながら、体験の「共有」としてただその場で共に過ごすことだけでは成立せず、心情や感情面における「共感」、長時間や高頻度という時間に関する条件をも満たさなければならない。

という4点であった。

軍隊内という特殊な社会において、フォーマルな関係というのは必ず存在し優遇されるという例外はありつつも絶対的な存在である。またインフォーマルな関係は、個々人が軍隊内で経験した要素、また元から保持していた要素によって、結ぶことができる位相やその有無というのは左右されるものである。更に言えば、フォーマルな関係が消滅した転役後のインフォーマルな関係というのは、2年間軍隊内で関わりを持っていたからといって必ず継続するものではなく、その密度によって消滅する可能性も十分考えられるのである。

ただ例外としては、詳しい事例で述べたとおり海兵隊員というのは他の部隊の兵士より非常に関係性が強固であり、軍隊内・転役後共にフォーマルな関係、インフォーマルな関係が非常に密接であるということが特徴的であったといえよう。

今後の課題

本論文では、韓国の兵役を終えた大学生のインタビュー内容を基に、兵役中と転役後の人間関係やその構成について分析を行ったが、本研究を進行する上で様々な課題点が見えてきた。

まず、1点目の課題としては転役後のエピソードや心情をより詳しく調査し、整理・分析することである。本発表では、転役後に「会う」「会わない」という事実は確認できたが、その行為に対する心情を聞き取ることはできなかった。今後は、転役後のエピソード、得に軍隊で知り合った仲間と「会う」という事実のみでなく個人の心情やそのように捉えた背景、またその場で繰り広げられた話題等についても聞き取り、分析を行いたい。

2点目は、インフォーマントと関りのある人物の立場を先輩・後輩・幹部等のみで捉えるのではなく、より詳しい職位で分類することである。軍隊内では入隊して1カ月の差があれば、上下関係が生まれるため、同位である人物だとしても接し方に差が現れる。よって、今後は、軍隊内の上下関係を明らかにするためには、同位の人物なのかまた異なる位の人物なのかそして、入隊してどれほどの差があるのかを調査する必要性があるだろう。

3点目は課題というよりも展望に繋がるが、現役の大学生のみではなく異なる世代のインフォーマントにも調査することである。本論文では、現役の大学生に調査を行ったが、現役の大学生に調査を行ったことで、現代の捉え方のみの調査になってしまうことと、転役してからの期間が非常に短いという難点があった。そのため今後の展望としては、世代ごとの特徴を捉えるという視点と、年を重ねるごとに変遷していく人間関係とその捉え方という視点について調査を行い、再度兵役に関する人間関係についての構成の分析と整理を行いたいと考える。

4点目は軍隊内で結んだ関係性以外に注目することである。本研究から得られたこととしては、軍隊内で得た関係性というのは、継続・消滅する原因である要素であったが、インタビューを重ねていくうちに興味深い点が見えてきた。それは、関係性を継続させる人・消滅させる人すべてとは言わないが、多くのイン

フォーマントが飲み会の席で軍隊について語っているということである。つまり、軍隊を出た後に得るまた継続させる人間関係に軍隊で得た経験を媒介として仲を深めているということである。これは、韓国人男性であれば皆が共通して得た経験であることが大きな要因であり、韓国人男性の人間関係について調査する大きな手掛かりとなるであろう。

以上の課題を基に今後も韓国人男性の人間関係についての調査を行いたいと考える。

参考文献

- 佐々木正徳 (2013) 「代替服務という生き方—韓国の男性性と兵役の多様性—」『長崎外大論叢』 17, 93-104
- 佐々木正徳 (2014) 「軍事文化からみる韓国のジェンダー秩序—補充役のポジションに着目して—」『長崎大学論叢』 18, 137-148
- 田中雅一編 (2015) 『軍隊の文化人類学』 風響社
- 春木育美 (2000) 「軍隊と韓国男性—兵役が韓国男性に与える影響—」『同志社社会学研究』 4, 53-65
- 尹載善 (2004) 『韓国の軍隊』 中公新書

文献に描かれた「曾槃像」 ——「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」を中心に——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース1年
景 徳

はじめに

江戸時代後期の本草学者曾槃（1758 - 1834）については、本草学及び博物学史の権威、白井光太郎・上野益三などによる先行研究がある。本稿は、曾槃に関わる情報、特に曾槃の家系及び人間関係に関する記録を中心として検討することで、先行研究ではまだ明らかになっていない「曾槃像」を提示することを目的とする。

従来、曾槃の伝記的研究は、浅田宗伯著『皇国名医伝』に基づいており、本書は代々の医学史、本草学史また博物学史研究家によって重要視されてきた。本稿では、既に曾槃の伝記資料として使われてものだが、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」という二つの資料を用いて、曾槃及び江戸後期における本草家のネットワークに着目して「曾槃像」の新たな一面を提示してみたい。

江戸時代は好奇心横溢の時代であり、上は将軍・大名から、下は富裕な町人に至るまで多くの好事家たちが、こぞって「諸国物産」に注目していた。江戸期から本草家が輩出し、日本の数多く動植物、鉱物研究の基礎を確立し、天産物の知識の集積が行われた。本草学は中国に起源をもち、日本に伝わってきたものだが、江戸時代になって急激に発達した。¹ 江戸前期の末に稲生若水が現われて、本草学が一つの学問として定着したが、のち本草学の舞台で活躍した阿部将翁（友之進）、松岡恕庵、丹羽正伯、野呂元丈等が著作を発表し大に振興した。² 八代将軍徳川吉宗は好奇心の強い

性格で、全国薬草の調査を主導し、若手の本草学者丹羽正伯などに命じ、諸国をくまなく調査させ、薬園の整備や薬種の流通ルートの確立に寄与した。また、吉宗はその他にもキリスト教以外の書物の輸入を促進するなど博物学の発展にも貢献した。彼の後押しで、博物学は大ブームとなるのである。一方、博物学に関わる江戸後期の代表的な人物は「蘭癖大名」と呼ばれる薩摩藩主島津重豪である。重豪は学問に興味を深く示し、藩校「造士館」、天文観測施設「明時館」など学術施設の開設を進めると同時に、農業を中心とした該博な博物学的知識を収録した『成形図説』、中国語を研究した『南山俗語考』、島津家の歴史を記した『島津国史』、薬草の効能や名称を中国に問い正した『質問本草』、『鳥名便覧』などの多くの書を編纂刊行させている。

薩摩藩の博物学の発達を推進し、その興隆をもたらしたのは、第二十五代の藩主島津重豪である。その重豪の博物学への好尚を、単なる大名の好事に終らせず、博物学史に残るべき業績として、有終の美を全うさせたのは重豪の侍医で記室³（秘書）の曾槃である。⁴ 槃はその主君の重豪が示した信頼に応え、始終一貫、誠実に職務に従うこと四十年⁵であった。薩藩の本草や博物学を著しく興隆させた功績は、一に曾槃の献身的な努力によるという他はない。⁶

³ 鹿児島市編『薩藩の文化』鹿児島市教育会（1935）P146 寛政四年（1792）三十五歳。藩主重豪の記室となる。

⁴ 上野益三『薩摩博物学史』島津出版会（1982）P135

⁵ 鹿児島市編『薩藩の文化』鹿児島市教育会（1935）P155 天保三年（1832）七十五歳。藩主重豪一代の偉業盛徳を記述せる『仰望節録』を刊行す。

⁶ 上野益三『薩摩博物学史』島津出版会（1982）P204

¹ 木村陽二郎『江戸期のナチュラルリスト』朝日新聞社（1988）P3～P4

² 日本学士院 日本科学史刊行会編『明治前日本医学史』（第一巻）日本学術振興会（1955）P28

しかしながら、曾槃にまつわる研究というのは曾槃の略伝や年譜の作成を中心になされ、あるいは曾槃の著書に着目するものが多かった。また、曾槃は『成形図説』⁷の編纂者のひとりとして世に周知されているのだが、曾槃及びその事業に関する記述については、間違いのある著述が多数存在することも注意すべきである。例えば、伊藤圭介の「本邦博物学起源沿革説」⁸に以下の記述があるが、その誤植は無視できない。

又出羽ノ人ニシテ薩藩ニ筮仕セシ曾尚啓（名槃字士攷號古春）ハ和漢博學ニシテ最モ本草ニ精研セリ藩命ニ因テ白尾國柱等ト力ヲ戮セ成形圖説ヲ百卷ヲ編輯セリ鴻業ト稱ス可シソノ三十卷ハ文化年間上梓世ニ公ニセリ又本草綱目纂疏（十三卷）國史昆蟲草木考、神農本草會識（九卷）古春齊魚品（二卷）介誌百馬皮相考藥園擷餘等ノ撰アリ或云質問本草ノ琉球吳繼志ハ假名ニシテ眞ニ其人アルニ非ズソノ草木質問ノ説ハ多ク曾氏ノ手ニ成ルト未ダ其實否ヲ詳カニセズ天保五年没年五十又七

短い文章の中に、「曾尚啓（字槃字士攷號古春）」、「古春齊魚品」、「没年五十又七」が誤っているところである。

よって、本稿では、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」の内容を用いて、曾槃及びその親族関係を解明しながら、曾槃と他の本草家が形成したネットワークや新しい曾槃の伝記的な事実を明らかにする。

⁷ 国書刊行会編『農商務省蔵版 農事参考書解題（全）』（1970）P124～P125：成形圖説（板本三十冊）

文化元年曾槃・白尾國柱等著ス所ニシテ卷一農桑大意、卷二田地類、卷三時節類、卷四秋田類、卷五稼穡類、卷六田賦類、卷七檢踏類、卷八墾闢類、卷九均田類、卷十儲蓄類、卷十一價直類、卷十二水利類、卷十三農器類、卷十四農具類、卷十五稻類、卷十六梗類、卷十七麥類、卷十八豆類、卷十九粟類、卷二十稗類、卷二十一、二十二、二十三園蔬類、卷二十四、二十五、葷辛類、卷二十六、二十七蔬瓜類、卷二十八、二十九、水菜類、三十野藪類ト爲シ農事ノ典據ヲ詳明ニシ農業ノ方法ヲ細シセリ

⁸ 伊藤圭介『植物学雑誌第百四十八號』P205

第一章 先行研究の検討

1. 曾槃及びその事業

『本朝医攷』⁹や『皇国名医伝』¹⁰の中に、日本医学史上、医師や医官に関する伝記を作ることは困難であると記されている¹¹。また、喜多邨直寛士栗が撰した「皇国名医伝序」は『本朝医攷』に欠けているところが多いということを指摘している。¹²後世の論述には、曾槃を医家として扱った『皇国名医伝』をはじめ、曾槃略伝と事業の確立をめぐって、研究がなされているのは先行研究の特徴の一つと言える。

明清時代に航海技術の進歩及び通商や貿易の発展に伴い、両国の医師は往来が頻繁であった。明清期、日本から中国へ医学を習う人は十人余り、その大部分は明の時代に中国へ渡航したものが、清の時代に日本は幕府の鎖国政策のため、中国へ渡る医家は少なかった。江戸前期に中国へ渡った医家の代表的な人物は竹田昌慶、山科景紹、田代三喜、半井明親や阿部将翁などである。¹³『皇国名医伝』には「阿部照任通称友之進号将翁南部人少時乗漕船赴江戸遇颶風漂清国止於福建十八年得本草学歸居江戸」と記録されている。¹⁴また、明の時代に日本に赴いた医家たちには、陳宗敬、許儀後、曾彦や陳明德などがいる。そして、曾槃の遠祖——曾彦¹⁵もその中にいた。明清鼎革の際、政治や戦

⁹ 黒川道祐『本朝醫考』三卷：上中の二卷に、神代以來慶長年間に至る諸名医の略傳を掲げ、下卷に丸散石薬の名稱及び『延喜式』の卷三十七より、諸司年料の雜業、諸固進年の雜業の種類品數等を抄録したるものなり。寛文三年癸丑〔二三二三〕刊行する。——『増訂国書解題』より p1813

¹⁰ 杉本つとむ：採択の人物は〈曲直瀬翠竹院〉をはじめとして、最終は〈多紀桂山〉に至る。ほぼ年代順に列伝体形式をとって記述、同時に関係人物にも及んでいる。日本人物情報大系第6回配本における学芸編〔解題〕より

情報源：<http://www.libro-koseisha.co.jp/top03/rb816.html>

¹¹ 西城侍医法眼兼医学教諭喜多邨直寛士栗撰「皇国名医伝序」：史之立傳自古稱難而医之傳更難矣

¹² 同上：黒川道祐掇拾諸家撰本朝医攷一書而掛漏亦多矣

¹³ 史世勤編《中医傳日史略》华中师范大学出版社（1991）P84～P95

¹⁴ 同上：P90

¹⁵ 浅田宗伯『皇国名医伝』中卷 十六丁、十七丁 勿誤藥室（嘉永4年）：磐字士考一字煥卿通称古春遠祖彦明人投化以医居長崎称庸山子孫承業兼為通事父昌啓始仕庄内侯磐繼職雅好本草檢討甚勉後

乱が原因で、張寿山、曹数成、劉有林や林瑞雲なども日本へ赴き世に名を残した。¹⁶ 清の時代に、幕府の招聘に応え、医術を日本に伝える目的で長崎に来た者もいた。¹⁷ 来日の医家は子孫や日本の医家に医術や医方を代々伝えて、その知識や経験は日本の医療・漢方また本草学の発達に影響を与えた。

曾槃は、上述のような中国から日本に渡ってきた医師曾彦の末裔である。『皇国名医伝』によれば、曾占春、本名は槃、字は士考、一字煥卿という。占春はその通称なり、遠祖曾彦は明の投化の人にして、医を以て業となし、長崎に居住し庸山と称す。子孫業を承け兼ねて通事たり、父昌啓の時に至りて、出羽庄内侯に仕う。占春も亦その職を継ぐ。¹⁸ 従来の研究では曾槃の人名に関する記述は殆ど『皇国名医伝』に基づき、「曾槃は平素本草を好み、勤勉に学問を検討する。のち禄を辞し、生徒を集め、本草を講授する」と記す。『皇国名医伝』には曾槃の履歴また著書などが書かれたが、「槃」を「磐」と誤ったり、記述が簡潔すぎるという憾みがあったりするものの、日本医学史における曾槃の地位を認めたところに意義があると考ええる。また『皇国名医伝』によって、阿部将翁の門人の中に田村藍水がいたことが指摘されているが、田村藍水は曾槃の師であり、将翁—藍水—曾槃という系譜が重要である。¹⁹

本草の学はもと薬品の性味能毒を分別する医学の一部であった。本草学は、動・植物学、鉱物学などにわたる壮大な学問であり、現在の博物学にはほぼ相当する。中国渡来のこの学問は、江戸期に日本独自の本草学を創成し、小野蘭山、畔田翠山により、その研究は頂点へと達した。曾槃については、前述通り、明治三十二年六月二十日発行の『植物学雑誌』第百四十八号に理学博士伊藤圭介著「本邦博物学起源沿革説」が収録さ

辞禄聚徒講授甕島侯編成図説聘啓任以総裁成一百卷天明中幕府医学創薬品會有審定官勘第物品幕府論薩藩使磐副其事歳以為常士考著有本草纂疏圃括要府志草木昆虫考水草志略皇和草譜等

¹⁶ 史世勤編《中医傳日史略》华中师范大学出版社（1991）P99

¹⁷ 同上：P99～P106

¹⁸ 武藤長平『曾占春及び其事業』（1916）鹿児島県立図書館所蔵（『皇国名医伝』より）

¹⁹ 浅田宗伯『皇国名医伝』中巻 十四丁、十五丁：阿部照任通稱友之進號將翁…中略…門人有田村登松井某通稱半兵衛…後略。浅田宗伯『皇国名医伝』中巻 十五丁、十六丁：登字玄臺通稱元雄號藍水…中略…門人有平賀国倫…中略…曾磐鈴木素平…後略…。

れ、その中に曾槃の略歴、業績と著書が書かれた。次いで、本草学に対する研究の領域では理学博士白井光太郎が、その著書『支那及日本本草学の沿革及本草家の傳記』で、曾槃の字について「占春は字士攷、幼名恒蔵、後松字と改む。字は槃、また昌啓、象山、昌適、永年と名く。占春と號す。」²⁰と字を追加した。そして、曾槃の生涯や著書を整理した上で、白井は「法號占春院弘譽昌適居士。門人に坂本純庵・高木春山・井上良雄・河名文系・坂丹邱あり。」²¹と戒名および門人たちの名を示した。こうして曾槃をめぐるのは、浅田『皇国名医伝』や伊藤「本邦博物学起源沿革説」では見られなかった情報が増え、江戸後期の本草家についてのネットワークを教える重要な手掛かりが与えられることになる。さらに、上野益三の『博物学者列伝』は「曾占春は薩摩博物学に生涯を捧げた人」だと評価し、総合的に曾槃の生涯の学績を追跡し、曾槃の学問は初期の狭義の本草学から、しだいに考証注釈を主とする名物学的色彩を濃くし、後半期は物産学となる、²²という評価を下す。近年では、磯野直秀の『日本博物誌年表』に「曾占春…（中略）…号占春・榛堂・永年。」と記し、また「父の曾庸山は明からの帰化人の四代目で、宝暦中に庄内藩主に仕え、名を昌啓と改める」と述べているが、曾槃の父は明からの帰化人の四代目であるというような情報の正しさも今後検証しなければならない。

第二章 「曾槃像」への接近

浅田宗伯（1815－1894）の『皇国名医伝』では、略伝や医家の著書を中心をとし、本草家の師承関係を明らかにするが、その中に「阿部将翁—田村藍水—曾槃」の系譜が見られたことは先述したとおりである。伊藤圭介（1803－1901）の「本邦博物学起源沿革説」は本草学の系統を強調し、江戸の本草家間のネットワークに着目する色彩が強い論考であった。白井光太郎（1863－1932）が集大成した『本草百家伝』には、『皇国名医伝』『博物学起源沿革説』『曾氏家牒』を収

²⁰ 白井光太郎『本草学論攷』第一冊（1933）春陽堂 P58

²¹ 同上 P59

²² 上野益三『博物学者列伝』（1991）八坂書房 P93

録し、これまでの曾槃をめぐるフォーマルな研究視点—医学史や本草学的側面—で研究を進めていった。これに対応しつつ、論者は資料の中からインフォーマルな視点—親族や一族の私的な関係—に注目していきたい。それが可能となるのは、「曾氏家牒」によってであり、これにより「曾槃像」の一側面が考察できると考える。また、「曾氏家牒」叙と略例の情報を整理することによって、さらに明確な「曾槃像」の確立の可能性が想定される。そして、もう一つの資料「曾氏家系記碑」の碑文がある。「曾氏家系記碑」は九世の孫を確立することをめぐって、曾槃自身が撰文したもので、ここから親族関係の情報が得られる。

従来の研究では、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」への関心はあまり強くなかったと考える。曾槃の生涯と著書に着目することが著しく、曾槃に対する考察は藩主重豪、門人や師匠との交渉を主とするフォーマルなパターンが頗る多い。「曾氏家系記碑」「曾氏家牒」の叙と略例は全て「福建曾氏第九世薩州侍医」、すなわち曾愿（曾槃の妹の長女の婿）が書いたもので、曾氏十二世の裔から竹下延保より附与したもの²³である。本稿では、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」の利用は従来の研究とは視点を変えて、新たな材料を重視しつつ、曾氏系譜を作成することをにらみ、「曾槃像」の異なる側面を検討し、親族関係から「曾槃像」への接近を試みたいと考えている。

1. 「曾氏家系記碑」の概略

この石碑は長崎県長崎市寺町の皓台寺の山門内南側にあり、高さは七尺、幅五丈である。²⁴「文政六年五月歸化明人曾氏九世の孫勝本要助尚慶」が建てたもので、その碑文は曾庸山八世の孫曾槃の撰したものであり、その碑文を書いた当時、曾槃は六十六歳であった。曾槃は薩摩侯島津重豪に仕へて侍醫となり物産志總閱に任せられ醫術及び本草學を以て天下に知られた學者であった。²⁵

²³ 木村陽二郎編『白井光太郎著作集』第Ⅵ巻『本草百家伝・その他』（1990）P94、P103

²⁴ 『長崎市史 地誌編 佛寺部上』P577

²⁵ 『長崎市史 地誌編 佛寺部上』（ママ）P577

「曾氏家系記碑」の原文（付録の1）によって、得られる情報は下記の通りである。

明清鼎革の際、曾彦（號庸山先生）は清律を避け、日本に帰化した。長崎に医術を以て、世を営んだ。七世まで先祖代々医術を以て、通訳を業とした。曾槃の父は祖号庸山先生を襲用し、庄内侯に仕え始め、昌啓と名を改め、今市で庄内侯のお供をする間胸痹で急死した。曾槃十九歳、父の職を継ぎ、亡くなった父の名（庸山）を襲用した。安永七年（1778）に致仕し、本草名物を業と為す。寛政四年（1792）に薩摩侯に仕え始めた。曾槃の母²⁶は元一橋重相公医員鈴木玄昌の妹であり、文化十年（1813）に病死し、諡は白柴である。官医奈須春竹の娘が曾槃の嫁になり、夫婦二人は娘一人がいた。文化五年（1808）小倉侯臣猪飼某二男が曾槃の婿になり、名を愿恭と改め、文化八年（1811）に医を以て（薩摩藩に）仕え、二男一女あり、長男の名は昌宇である。先考の妹は勝本和輔の嫁になり、女一人がいる。長門山口人某子は勝本和輔の婿になり、名は要蔵で、一男一女がいる。長男は尚慶である。文政六年（1823）の春、要蔵が尚慶に業を譲るのをきっかけとして、曾槃は尚慶の曾氏九世の孫と定めた。また、曾槃は尚慶と長崎曾氏十世を謀り、正系と年譜を尚慶に与えた。尚慶は子孫に永く伝えるように、皓台寺にこの石碑を建てた。

この碑文に基づき、曾氏家系の内容を整理すると、図1のようになる。

表1は、人名、没年、享年と諡を碑文（原文）から抽出したもので、碑文から得られた直接的情報は背景を赤としている。生年また没年の西暦の表記は、先述した情報によって推算したもので、表では黄色の背景としている。また、左端の家世は第八世の曾槃や第七世の曾庸山のような明確な情報によって遡った結果である。

2. 「曾氏家牒」の概略

白井光太郎『本草百家伝』の中では、「曾氏家牒」より「曾氏家牒」の叙と略例は先に出るもので、曾愿

²⁶ 同上 P578: 大妣（ママ）前 一橋重相公医員鈴木玄昌の妹也。「先妣」を「大妣」と誤記する可能

表 1 「曾氏家系記碑」に基づく曾氏の代々

家世	人名	生年	生年 西暦	卒年	卒年 西暦	享年	諡
第一世 (遠祖)							
第二世	曾彦 (號庸山)	永禄八年 (嘉靖44年)	1565年	正保二年 十月十五日	1645年	八十一歳	梅翁
第三世	曾庸輔	文禄三年	1594年	明暦元年 十一月二十四日	1655年	六十二歳	一峰
第四世	曾庸左衛門	元和六年	1620年	万治三年 九月二十九日	1660年	四十一歳	孤峰
第五世	曾伍左衛門	不詳	不詳	元禄十六年 二月二十三日	1703年	不詳	天茂
第六世	曾九兵衛	不詳	不詳	享保五年 四月六日	1720年	不詳	修閑
第七世	曾庸山	正徳四年	1714年	安永五年 四月十五日	1776年	六十三歳	瑞巖
第八世	曾槃 (號占春)	宝暦八年	1758年	天保五年 二月二十日	1834年	七十七歳	
第九世	勝本尚慶要助	天明八年	1788年				
第十世							

表 2 「曾氏家牒」に基づく曾氏の代々

太祖	梅心曾先生							
第二世	曾正直 (天水彦左衛門)							
第三世	曾順節 (天水順節)	曾某 (天水伊左衛門)	曾某 (天水市左衛門)	曾某[曾助] (天水市太郎)	曾某 (天水孝右衛門)	曾某 (天水喜右衛門)	曾某 (天水安右衛門)	曾某 (天水猶右衛門)
第四世	曾某 (井野五右衛門)							
第五世	曾某 (井野岱右衛門)	曾某[曾良右衛門] (井野良右衛門)	曾某 (曾仲兵衛)	曾某 (曾応助)	曾某 (曾仲大)			
第六世	曾某 (井野九兵衛)	女 (号妙貞)	曾某 (井野貞右衛門)	曾某 (井野仲太)	曾某 (井野太兵衛)	曾某 (井野五兵衛)	曾某 (井野新兵衛)	
第七世	曾周政[曾松敬] (井野又七)	女 (名鶴)	曾某 (井野武兵衛)	女 (号春同童女)				
第八世	曾槃 (号占春院弘曾昌 遠居士)	某[私松二郎] (号桂月真夢童子)	曾道啓	女 (名光)				
第九世	曾愿 (又愿啓應恭)	女 (名信)	女 (親相如空童女)					
第十世	曾棟	女 (名更)	曾體					
(第十一 世)	女 (号幻芳童女)	女 (号旭露童女)	女 (名一)	女 (名題)	曾朔 (童名昌宇)	曾珪 (童名庸輔)	女 (名多)	

が撰した「曾氏家牒」叙によって、「曾氏之伝統未審云系出于明之曾我懷也」と記した。また、曾愿は自ら撰した「曾氏家牒」略例の中で、「祖考之遺言云其先系于曾我懷是説為本曾岱右衛門之記也」と述べている。また、「井記応記共不言系出于曾我懷以五（井野五右衛門）為祖而抄記挙祖考之遺言而并云太祖投化于

薩成」の記述を「曾氏家牒」の内容と比較して、「父の曾庸山は明からの帰化人の四代目で、宝暦中に庄内藩主に仕え、名を昌啓と改めた」という事実も抽出できる。²⁷「曾氏家牒」の成立は「文化己卯九月望後一日」であるが、干支紀元で「己卯」の年は「文政二年」の

²⁷ 磯野直秀『日本博物誌年表』（2002）平凡社 P301.P302

ことを指していると考えられる。

「曾氏家牒」の成立過程の記述は従来の「曾槃像」を補完するのに大いに意味を持つ。まず、本系としての曾愿は「勝本為曾氏之支派而勝本故曰西田清和之流也」と強調した。つまり、曾愿は同じ九世の子孫であっても勝本は支派（支系）に過ぎず、自分こそが本系であると主張しているのである。そして曾愿は、曾氏一族の将来のために、実地調査と文献の考察を基にして、先祖の由来と従来代々の親族の情報を詳しく書き留めた。それは、単に、名や諡と墓の場所などの記録だけではなく、遠祖と後裔の行方も明らかにしたもので、従来、研究家の視点は曾槃を中心として、その子孫に及ばないのだが、「曾氏家牒」では「九世曾愿」と「十世曾榛」の情報も示している。

以上、「曾氏家牒」から得られた情報を抽出したものが表2である。曾氏太祖から十世曾榛までに曾氏に関わる人名やその通称を記入した。諡や略伝を略すことによって、曾氏の系譜が明瞭に分かる。家世は第十世までであるが、その子どもの代（十一世）の内容も含まれていることが重要である。

第三章、曾槃のネットワークについて

1. 文献に描かれた「曾槃像」

江戸時代中期の本草家は系統的に二つに分けることができる。²⁸ 一は稲生若水——松岡恕庵——小野蘭山と受継がれたもので、主として、文献上の知識の集積によって、日本本草学の体系化をはかろうとするものであった。「文献派」と名付けることもできよう。これに対して、「実地派」とも名付けるべき別の派があった。阿部将翁を祖とするもので、その弟子に田村藍水があり、藍水の弟子に、曾槃（占春）、田村西湖、平賀源内等がいた。²⁹ この派の人々の多くは各地をめぐって採薬に従事し、現物と文献の記載を比較検討することに重点をおいた。その傑出的本草家の一人とも言うべき曾槃すなわち曾占春については、経歴も

著作も、上下関係や親族関係などについて、まだ不明な点が多い。そして、前述のように、曾槃は本草学を田村藍水に就いて修めたことを明らかにしている。また、曾槃は医学を多紀元恵（號藍溪）³⁰ に学んだ。寛政三年（1791）、藍溪が自ら経営統率した私立の医学校は官に移管されて、幕府の医学館と称した。多紀元恵（徳）に就いて医学を身につけた曾槃は、のち堀本蘇山³¹ という人の推薦で、重豪の侍医に採用された。曾槃は重豪に見出されたことで、その学才を大いに伸ばすことができた。曾槃は広博な本草の知識を持ち、藩主の信頼に応えつつ、薩摩藩本草学に生涯を捧げたのであった。

曾槃の功績は藩主の命を受け、『成形図説』を編纂し、それを上梓したことが含まれるが、これらに限られない。幕府奥医師多紀氏の私営になる躋寿館^{せいじゅかん}で、有志の生徒を入学させ、医学を学習させた。曾槃がその本草学の師元雄の代講を務め³²、また、医学館の考試（試験）³³ に従事したこともある。³⁴ 曾槃の門人には坂本純庵・高木春山・井上良雄・河名文系・坂丹邱³⁵ がいたが、阿部将翁の曾孫阿部樸斎³⁶ も曾槃の門人の一人であった。それを通じて、才知の優れた曾槃の姿が浮かんできた。藩主と先生のめがねにかなったと同時に、弟子の敬愛も博した。特に、阿部樸斎は曾槃の門人として、占春先生の著書を写したことはその証左であろうか。以上、曾槃に関する記述により曾槃と他の本草家が形成したネットワークや曾槃の伝記的な事実を明らかにした。本論文では、曾槃の門人についてはまだ明らかにしていないことが存在しているが、これらはまた今後の研究課題としたい。

²⁸ 上野益三『博物学者列伝』（1991）八坂書房 P90

³¹ 内藤喬『曾占春先生と「成形図説」』（1938）鹿児島高等農林学校校友会報「土」第十二号別刷 P3

³² 上野益三『博物学者列伝』（1991）八坂書房 P90

³³ 同上

³⁴ 『長崎市史 地誌編 佛寺部上』P578～P579：「曾氏家系記碑」：自天明年於躋壽館有藥品眞偽辨別之命余奉其審定之助考三十餘年于斯矣

³⁵ 白井光太郎「曾占春傳」（1928）P 3

³⁶ 平野満「幕末の本草学者阿部喜任（樸斎）の年譜」（2002）『参考書誌研究』第56号 P4

²⁸ 杉本つとむ『江戸の博物学者たち』（2006）講談社 P14

²⁹ 中田吉信「本草家阿部照任とその著作」（1975）『参考書誌研究』第一号 P7、P8 より

2. 文献に描かれた曾槃に関するネットワーク

表1と表2を合わせて、曾氏家世の記述に関わる相違点を説明する。「曾氏家系記碑」によって、「曾彦→曾庸輔→曾庸左衛門→曾伍左衛門→曾九兵衛→曾庸山→曾槃→勝本尚慶」の家世についての流れが分かる。「曾氏家牒」によって、「梅心曾先生→曾正直（天水彦左衛門）→曾順節（天水順節）→井野五右衛門→井野岱右衛門→井野九兵衛→曾周政（井野又七）→曾槃→曾愿→曾榛」の家世が明らかに見える。第六世以前の表記にはずれている部分が多かった。第六世から第八世までの部分は問題はないだろう。その中に注意すべきものは、昔曾氏が「井野」という苗字を使ったことである。第九世まで、勝本尚慶と曾愿の二つの曾氏の系譜が存在した事実は無視してはいけない。

「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」に基づいて、曾槃の家系を中心にして、図表（表3）を完成した。

曾氏第六世の祖は井野九兵衛であり、「曾氏家牒」

の中に「曾某 称井野九兵衛岱右衛門之子」と記された。第七世の曾庸山は井野九兵衛の三子³⁷である。妻は鈴木氏³⁸であり、一橋公侍医鈴木玄昌の妹であった。第八世曾槃の妻は奈須氏であり、宦医奈須玄真の妹である。³⁹ 曾槃の妹は光で、日野屋善次郎の妻となって、その間に女子が三人生まれた。光の長女は曾槃の養子となった。⁴⁰ 長女は信⁴¹ 呼ばれ、第九世の曾愿の妻である。曾愿は天明八年（1788）に生れ⁴²、

³⁷ 木村陽二郎編『白井光太郎著作集』第Ⅵ巻『本草百家伝・その他』（1990）P99：名周政字昌啓初称井野又七後称松敬号庸山九兵衛之三子也。

³⁸ 同上 P100：先生娶鈴木氏生三男三女配鈴木氏一橋公侍医鈴木玄昌之妹也生于上総国望陀郡阪田邑文化十年癸酉十一月二十九日以病卒葬于正源寺諡白柴法尼謙寿院聞举白柴大姉享年七十有八

³⁹ 同上 P101～P102：配奈須氏宦医奈須玄真之妹也天保九年戊戌二月五日卒年七十七葬于正源寺号齡松院勁誉寿貞大姉

⁴⁰ 同上 P101：女 名光嫁日野屋善次郎生三女占春先生以無子取長女子寛政六年八月二十一日卒葬于正源寺号覺月了秋年二十八

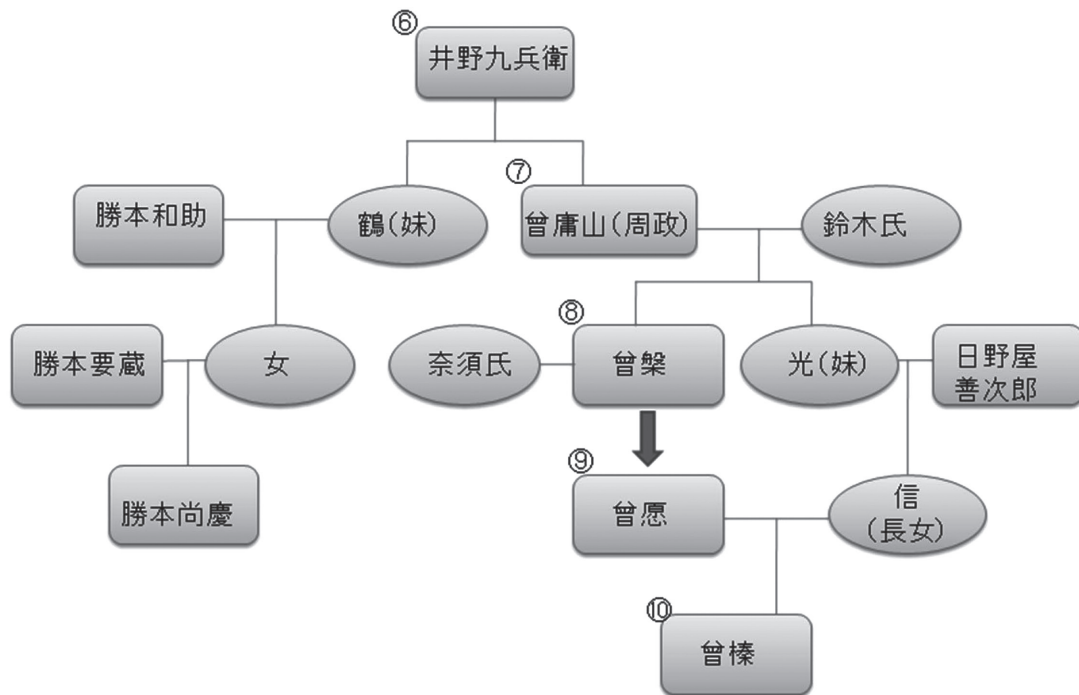
⁴¹ 同上 P102：女 名信為家嗣愿妻生二男二女文政二年己卯八月十八日病卒葬于正源寺諡敬性専称院法誉敬性大姉

⁴² 同上 P101～P102：名愿字公恭童名慎二郎又称新十郎為一郎野平

表3 曾氏の家世の比較

家世	「曾氏家系記碑」人名	「曾氏家牒」人名
第一世 (遠祖)		梅心曾先生
第二世	曾彦 (號庸山)	曾正直 (天水彦左衛門)
第三世	曾庸輔	曾順節 (天水順節)
第四世	曾庸左衛門	曾某 (井野五右衛門)
第五世	曾伍左衛門	曾某 (井野岱右衛門)
第六世	曾九兵衛	曾某 (井野九兵衛)
第七世	曾庸山	曾周政〔曾松敬〕 (井野又七)
第八世	曾槃 (號占春)	曾槃 (号占春院弘誉昌適居士)
第九世	勝本尚慶要助	曾愿 (又愿啓愿恭)
第十世		曾榛

図1 曾氏系譜略図



(注：丸の中の数字は曾家の当主の代数を表す)

文化五年（1808）曾槃の養子⁴³となり、のち薩摩藩の侍医となった。図1を通じて、曾槃の家庭構成についてのことが察知できる。曾氏の婚姻状況を見れば、医家に関する氏族と縁組を結ぶ傾向があった。第七世曾庸山の妹鶴は勝本和輔（一説和助）の嫁になり、夫婦は女の子一人がいる。長門山口の男子は勝本和輔の婿になって、名は要蔵といい、長男は尚慶である。文政六年（1823）の春、要蔵が尚慶に業を譲るきっかけに、曾槃は尚慶を曾氏九世の孫と定めた。⁴⁴

おわりに

本稿では、曾槃の先祖「曾彦」をてがかりにして、

甚十郎又愿啓愿恭号屈蟠纂々居士天明八年未月生于千束村龍泉街小倉侯臣猪飼叔蔵正路之二子母者川関氏

⁴³ 同上 P102：文化五年戊辰占春先生介持田某而取愿為嗣也

⁴⁴ 『長崎市史 地誌編 佛寺部上』P579：先考妹嫁同？勝本和輔有一女長門山人口人某子為婿名曰要蔵有一男一女男名曰尚慶産業日繁富今春要蔵讓業尚慶改名一山年七十二婦改名室年六十七共通世近街涵養天年尚慶年三十六謹身節用能事二親能紹其業尚慶則曾氏九世之孫也

『皇国名医伝』や『支那及日本本草学の沿革及本草家の傳記』において曾槃に関わる浅田宗伯と伊藤圭介の記述を訂正するとともに、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」から抽出した曾槃に関わる情報を比較検討して、曾槃の家系及び人間関係を明らかにした。曾槃が養子を引き取る事実をはっきりとした。さらに、曾氏の婚姻状況を見れば、医家に関する氏族と縁組を結んだ傾向があったことも確認できる。そう見れば、明から日本に赴いた帰化人の後裔としての曾槃は家業を続けるために、曾愿を養子として引き取ったのは江戸期の日本社会によく溶け込んだ証拠だと言えるのだろう。

また、「曾槃像」をめぐる文献によって、江戸時代薩摩藩侍医曾槃の記述は浅田宗伯著『皇国名医伝』に基づいており、代々の医学史、本草学史また博物学史研究家によって、曾槃についての資料は重要されてきたと言える。さらに、「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」から示した情報を用いて、曾槃及び江戸後期における本草家のネットワークにおいて、医官間の縁組を結ぶことも確認できた。今後は新たな「曾槃像」を描く

ために、江戸の本草学者、医学者などをネットワークの枠組みの中に置いて、その人々の位置付けなどを検討していきたいと考える。

参考文献

浅田宗伯（嘉永4年）『皇国名医伝』 勿誤薬室

伊藤圭介（明治32年）『本邦博物学起源沿革説』『植物学雑誌』 第百四十八號

磯野直秀（2002）『日本博物誌年表』 平凡社

上野益三（1989）『日本博物学史』 講談社

上野益三（1991）『博物学者列伝』 八坂書房

上野益三（昭和48年）『日本博物学史』 平凡社

上野益三（昭和57年）『薩摩博物学史』 島津出版会

关西大学文化交渉学教育研究中心・出版博物館編（2011）『印刷出版与知識环流——十六世紀以后的东亚』世紀出版集團・上海人民出版社

鹿児島県編（平成14年）『鹿児島県史料集（41）薩藩学事二・薩藩学事三』 鹿児島県史料刊行会

鹿児島市編（昭和10年）『薩藩の文化』 鹿児島市教育会

木宮泰彦（著）・胡錫年（译）（1980）『日中文化交流史』 商务印书馆出版

木宮泰彦（昭和15年）『日支文化交渉史一覽図と年表』 富山房

木村陽二郎（1988）『江戸期のナチュラリスト』 朝日新聞社

古賀十二郎（昭和42年）『長崎洋学史』（上・下巻） 長崎文献社

国史研究会編（大正6年）『日本偉人言行資料 仰望節録 仰望節録附餘 常陸帶』 国史研究会

国書刊行会編（昭和45年）『農商務省蔵版 農事参考書解題（全）』

国書刊行会編（大正元年）『増訂武江年表』

佐村八郎（昭和6年）『増訂国書解題』 六合館

史世勤編（1991）『中医傳日史略』 华中师范大学出版社

白井光太郎（1990）『白井光太郎著作集第Ⅵ巻：本草百家伝・その他』 科学書院

白井光太郎（昭和4年）『曾占春傳』 呉教授莅職二十五年記念文集別刷

白井光太郎（昭和55年）『日本博物学年表（全）』 科学書院

白井光太郎（昭和8年）『本草学論攷』 春陽堂

杉本つとむ（2006）『江戸の博物者たち』 講談社

関 晃（2009）『帰化人 古代の政治・経済・文化を語る』 講談社

宋越倫編著（民国55年）（1966）『中日民族文化交流史』 中正書局

宋越倫（民国76年）（1987）『日本華僑概況』 正中書局

東京科学博物館編（昭和44年）『江戸時代の科学』 名著刊行会

中村質（2000）『近世対外交渉史』 吉川弘文館

長崎市編（大正12年）『長崎市史』（全九巻）（地誌編 佛寺部 上） 清文堂

長崎中国交流史協会 編（2001）『長崎華僑物語』 長崎県労働金庫

内藤喬（昭和13年）「曾占春先生と「成形図説」」 鹿児島高等農林学校校友会報「土」 第十二号

日本学士院日本科学史刊行会編（1955）『明治前日本医学史』（第一巻） 日本学術振興会

日本学士院日本科学史刊行会編（1956）『明治前日本医学史』（第三巻） 日本学術振興会

日本学士院日本科学史刊行会編（昭和32年）『明治前日本薬物学史』（第一巻） 日本学術振興会

日本学士院日本科学史刊行会編（昭和33年）『明治前日本薬物学史』（第二巻） 日本学術振興会

日本学士院日本科学史刊行会編（昭和35年）『明治前日本生物学史』（第一巻） 日本学術振興会

富士川游（昭和17年）『日本医学史』 形成社

福岡ユネスコ編『九州文化論集2 外来文化と九州』 平凡社

藤田豊（昭和31年）『日本科学技術史』 明玄書房

ヘルベルト・プルチョウ（2005）『江戸の旅日記』 集英社

武藤長平（大正5年）『曾占春及び其事業』

森銑三（1986）『近世人物夜話』 講談社

山本博文監修（2007）『江戸時代人名控1000』 小学館

吉田忠・李廷挙編（1998）『日中文化交流史業書 第8巻 科学技術』大修館書店

罗晃潮（1994）《日本华侨史》广东省高等教育出版社

李嘉（1986）《蓬莱谈古说今》吉林文史出版社

梁容若（1985）《中日文化交流史论》商务印书馆

附録：（句点をほどこした「曾氏家系記碑」と内容が重ねた「曾氏家牒」を整理した上で掲示する。）

1. 「曾氏家系記碑」の原文：

海外朱明之世屢衰、爲西清其國遂亡、其民則從清律薙髮、參攷墓表及舊識、余之遠祖福建人曾氏、名彥號庸山、先生蓋避清律歸化、本邦、在肥之長崎以醫術營世、其遺書今尚存焉、先生正保二年十月十五日卒、享年八十一、**溢**梅翁、葬于同**墓**皓臺寺、嘗聞石碑右傍文字漫漶、但存慶長十一年午歲福建曾氏記十二字耳、意是先生遠祖系乎、今莫識焉者、余深嘆之、先生男曾庸輔明曆元年十一月二十四日卒、享年六十二、諡一峰、其男曾庸左衛門、万治三年九月二十九日卒、享年四十一、諡孤峰、共葬于皓臺寺、其男曾伍左衛門、元祿十六年二月二十三日卒、享年不審、諡天茂、其男九兵衛、享保五年四月六日卒、享年不審、諡修閑、共葬于同**墓**聖德寺、其男則余之先考庸山先生也、即襲用颺號爲名、至七世皆以醫術及通譯潤文爲業、寬延年先客遊寶土、荏曆年始祿、仕庄内侯、改名昌啓、安永五年夏四月、蒙命巡守日光山麓、今市驛、先考陪駕在今市、同月十五日遽患胸痺卒于驛長家、享年六十三、諡瑞巖、葬于同驛大樹寺、分葬遺骨於荏土永代島正源寺、余年十九紹業賜祿如故、即襲用先考名、安永七年有故辭祿、爲草莽之臣、以本草名物之學爲業、寬政四年祿仕薩摩、列侍醫職任物産志總閱、其志一百、今既刻其半、大妣前一橋亞相公醫員鈴木玄昌妹也、有三男二女、文化十年嬰病、同年十一月二十九日卒、享年七十九、諡白柴、葬于正源寺、余娶官醫奈須赤竹女、有一女、文化五年小倉臣猪飼某二男爲婿、改名愿恭、同八年以醫而仕、有二男一女、長男名昌宇、年十三自欲紹余之職、余嚮避公子名、改名適先、是自天明年於躋壽館有藥品眞僞辨別之命、余奉其審定之助考三十餘年于斯矣、是

以文化十二年褒賞銀侯榮之加賞、七世之孫又在長崎、則先考妹、嫁同**墓**勝本和輔、有一女、長門山口人某子爲婿、名曰要藏、有一男一女、男名日尚慶、産業日繁富、今春要藏讓業尚慶、改名一山、年七十二、婦改名室、年六十七、共通世近街涵養天年、尚慶年三十六、謹身節用、能事二親、能紹其業、尚慶則曾氏九世之孫也、今茲夏四月、尚慶問余於荏土、謀于余欲立曾氏十世於長崎、匡曾氏家系及余之年譜、因記正系且年譜而與焉、竟乃謂余云、欲勒之於貞石樹皓臺寺山中、以永傳于裔孫、噫嘻、尚慶齊家之盛心其厚矣乎哉、於是亟作斯記維時文政六年歲次癸未夏五月朔旦

福建曾氏八世之孫曾槃士攷拜撰並書、時年六十六

福建曾氏九世之孫勝本庸助尚慶立石

2. 「曾氏家牒」の原文

曾氏家牒

第一世	曾興（字我懷、号庸山、福建漳州）
第二世	曾正直（名正直、字、称天水彦左衛門、梅心先生之子也）
第三世	曾順節（名順節、字、称天水順節、正直之子也） 曾某（称天水伊左衛門、正直之二子也） 曾某（称天水市左衛門） 曾某（称天水伊左衛門） 曾某（称天水市左衛門） 曾某（称天水市太郎、後名曾助、今移于麿府） 曾某（称天水孝右衛門、伊左衛門之二子也） 曾某（称天水喜右衛門、葬于淨円寺） 曾某（称天水安右衛門、葬于淨円寺） 曾某（称天水猶右衛門、居于出水）
第四世	曾某（称井野五右衛門、生于肥国佐賀郡井野邑、不好医、為商、与父移同国

長崎、号井野屋、後去屋字、元祿十六年未二月二十三日卒、葬于聖寺山譽大茂 配某氏宝永三年戊七月十日卒、葬于聖德寺、諡宝譽栄三)

第五世

曾某 (称井野岱右衛門、五右衛門之子也、葬于聖德寺、諡悦譽良喜)
曾某 (称井野良右衛門、為市井之吏、後称曾良右衛門、墓在于大養寺)
曾孫 (ママ) (称曾仲兵衛、葬于大養寺)
曾某 (称曾応助、葬于大養寺)
曾某 (称曾仲大、為井野貞右衛門嗣)
曾某 (称曾応助、為島原藩之小吏_{屋代}、葬于大養寺)
曾某 (称曾応助、繼父業)

第六世

曾某 (称井野九兵衛、岱右衛門之子、享保五年子四月二十日卒、葬于諡專譽閑修、配某氏宝曆二年申八月二十九日卒、葬于聖德寺、諡緑譽寿因)
女 (享保十一年午九月六日卒、葬于聖德寺、号妙貞)
曾某 (通称未審、九兵衛之子也、享保十二年未八月二十九日卒、葬于聖德寺、号順譽感隨)
曾某 (称井野仲太、有事凶而家絶)
曾某 (称井野太兵衛、葬于聖德寺)
曾某 (称井野五兵衛、家于蛭子街)
曾某 (称井野新兵衛)

第七世

曾周政 (名周政、字昌啓、初称井野又七、後称松敬、号庸山、九兵衛之三子也、〇〇年〇〇月生于肥之長嵯、及長因市長高島何某八郎兵衛家而居、不得意、為医復祖先之業、称旧姓名曾昌啓、宝曆初年、發憤遠負笈、遂来于江戸、主大津屋某善太郎家而寓焉、先生素修内外科、殊善栗寄派之西蛮之技術、終以技奉仕於執政庄内侯、而賜俸録二十口、為侍医、安永五年、丙申四月日光

詣御之役侯奉台命鎮衛市駅、先生陪從之、四月十四日罹暴病、卒于郵長大橋某家、享年六十有三矣、葬于同聚大樹寺台宗、諡瑞巖先生崇寿院松敬瑞巖居、先生娶鈴木氏、生三男三女、配鈴木氏一橋公侍医鈴木玄昌之妹也、生于上総国望陀郡阪田邑、文化十年癸酉十一月二十九日以病卒、葬于正源寺、諡白柴法尼謙寿院聞挙白柴大姉、享年七十有八)

女 (名鶴、生于長嵯、嫁勝本和助生二男一女、文化元年甲子四月九日卒于勸善寺)

曾某 (称井野武兵衛、為泉州堺藤谷某嗣、卒于長嵯、葬于聖德寺、号慈眼教西)
女 (名 、宝曆九年 月生于江戸、宝曆九年_{巳卯}正月夭、葬于正源寺、号春岡童女)

第八世

曾槃 (名槃字、士攷、幼名恒藏、後名松宇、又称松敬、昌啓、象山、昌適、年甫十七嗣箕裘、奉仕於庄内侯、不得意、年十九辭仕而去、放遊於四方有年、嘗從藍水田村先生、研究本草学以為任、不怠、又從藍溪多紀先生、而坐躋寿館講義本草、天明四年甲辰領医学考試之事、於是先生名益張大、而都下云本草名物者咸從先生、寛政四年壬子年三十二秋九月、由蘓山堀本先生之昇推、再奉仕於吾薩之 重豪公、賜祿四人賦十吾金三十兩藥四石等、置外班直医上、寛政五年癸丑正月奉種參之令赴于薩、明年甲寅七月畢命而歸、又寛政年奉成形図説總裁之令赴薩、是月爵賜侍医、天保五年甲午二月二十日卒享年七十七、葬于正源寺、号占春院弘譽昌適居士、配奈須氏宦医奈須玄真之妹也、天保九年戊戌二月五日卒、年七十七、葬于正源寺号齡松院勁譽寿貞大姉)
某 (私松二郎、十二月卒、葬于正源寺、

号桂月真夢童子)

曾道啓(名道啓、字 、生于江戸、寛政元年己酉六月六日卒、葬于正源寺、号自法性円、享年二十)

女(名光、嫁日野屋善次郎、生三女、占春先生以無子取長女子、寛政六年八月二十一日卒、葬于正源寺、号覺月了秋、年二十八)

第九世

曾愿(名愿、字公恭、童名慎二郎、又称新十郎、為一郎、野平甚十郎、又愿啓、愿恭、号屈螻纂々居士、天明八年未月、生于千束村龍泉街、小倉侯臣猪飼叔藏正路之二子、母者川関氏、初為外戚川関等()嗣、而奉仕于小倉侯也、不得意、年二十一凶而去之信濃、寓大池某弥三右衛門、志在赴京師、入于淇園先生之門下、而立業聞先生没、還江戸居君山先生家終為医、入桂山多紀先生之門、文化五年戊辰、占春先生介持田某而取愿為嗣也、文化八年辛未五月三日為参侍医、賜五人賦藥十石单、奉家学伝南山太公也、文化十二年乙亥、奉命赴于薩、八月十九日發江戸、海陸三十余日、九月十九日到藩府巡查薩隅日之山野海浜、主草藥種植及製参之事、明年丙子三月賜白銀五枚金二十兩之賞、五月朔發藩府、六月二十日歸于江戸、文政元年戊寅三月二十三日轉於侍医本科兼本草督学、如故免 太公之伝而為参診宿直、天保十三壬寅年七月八日卒、享年五十六、葬于正源寺、号占春院清譽無賜居士)

女(名信、為家嗣、愿妻、生二男二女、文政二年己卯八月十八日病卒、葬于正源寺、諡敬性専称院法譽敬性大姉)

女(文化七年庚午四月十三日生于江戸八町(丁)堀、即日夭、葬于正源寺、号如空觀相如空童女)

第十世

曾榛(名榛、字秦木、童名恒藏、後称松宇、文化八年辛未三月五日生于江戸八丁堀、愿之子、母者曾氏、文政十三年庚寅二月七日為参侍医、天保十三年壬寅九月六日命家督、翌十四年三月朔日改昌啓、転侍医而為参診宿直、文久三癸亥二月四日以病卒于白金寓居、葬于深川正源寺、享年五十三、号占春院耀譽昌啓居士、配薩藩千頭猯藏季平娘也)

女(名称、後名更、愿之二女、母者曾氏、文化十一年甲戌二月五日生江戸八町(丁)堀)

曾瞿(名瞿、字聖曇、童名天水依世諺也、福次郎、称昌濟、愿之二子、母者曾氏、文化十四年丁丑四月八日生于江戸八町堀、天保四年癸巳十月、薩府之嗣有田治吉家、同九年戊戌十一月亡名、天保十一年庚子八月病死于銀座小林冬溪宅、享年二十七、葬于正源寺、号勇岳猛道居士)

女(名鋼、榛之嫡女、母千頭氏、天保十年己亥十二月二十二日生桜田官舎、同十一年庚子八月六日早世、葬于正源寺、号幻芳童女)

女(榛之二女、母千頭氏、天保十二年辛丑二月十八日曉生、此夜半死、葬于正源寺、号旭露童女)

女(名一、榛之三女、母千頭氏、天保十三年壬寅十一月十八日生桜田官舎)

女(名題、榛之四女、母千頭氏、弘化三年丙午三月朔日生于桜田官舎、嘉永五年壬子閏二月五日病卒、年七歳、葬于正源寺、号梅薫智芳童女)

曾朔(名朔、号清月、童名昌宇、喜永二年己酉八月朔日生于芝森元、榛之子、母者千頭氏)

曾珪(名珪、字圭玉、童名庸輔、安政二年乙卯二月二十五日生于芝森元、榛

之次男、母者千頭氏)

女(名多音、榛之五女、母千頭氏、安
政五年戊午六月五日生于高輪官舎)

大正三年十二月

曾氏十二世の裔

竹下延保氏より附与

平成 30 年度プロジェクト研究概要

熊 華磊
(プロジェクト研究指導補佐)

●前年度プロジェクト研究の課題

前年度のプロジェクト研究報告会の課題として、1人当たりの発表時間が短いことと、共同テーマについての議論が不足であることと、前号の報告集の中で書きました。具体的にいうと、前年度は2名ずつ2組と3名1組の計3組による発表で、1人当たりの発表時間は12分ほどしかありませんでした。また、3組による発表とそれに対する質疑や論評だけで報告会が終わってしまい、ディスカッション等を設ける時間がありませんでした。

一方、前年度の発表者が7名いるのに対し、今年度の発表予定者が5名となります。つまり、1人当たりの発表時間に余裕を持たせること、さらに、報告会におけるディスカッションの時間を設けることが十分可能だと、スタートの時点でそう考えました。

●夏季合宿について

今年度は28年度のプロ研を踏襲し、教員と院生の親睦や、共同テーマに関する議論を図るため、夏季には曾於市と都城市において合宿を行いました。

曾於市では、午前中に市役所の方や商工会の方と座談会を行い、曾於市の現状や、行政及び商工会が地域づくりにおいて努力しているところについて話を伺いました。

午後は関の尾滝をはじめ、曾於市・都城市近辺の自然を満喫した後、宿泊地である「たからべ森の学校」へ向かいました。ここは元々曾於市立財部北中学校でしたが、2012年閉校となり、翌年

の2013年から校舎や跡地をそのままに職業訓練施設として「たからべ森の学校」が開校されました。さらに、2018年に学校体験型宿泊施設「たからべ森の学校 星に宿」がオープンされました。近年、地方における小中学校の統合による廃校が相次ぎ、残された校舎や跡地の利用が各地の大きな課題となっています。それに対し、「たからべ森の学校」がまさに一つの対策モデルを提示していると思われます。その実際について、泊まりながら、スタッフの方の話や近隣住民の話を聞くことができて、いい経験となりました。

合宿の二日目はさらに都城島津邸や霧島酒造が運営する霧島ファクトリーガーデン、また、都城市富吉地区で伝承されている弥五郎どんについて展示・紹介する弥五郎どんの館を見学しました。2日間の合宿を通して、曾於市・都城市の自然・文化・歴史・産業などについて知識を深めました。また、発表予定者のそれぞれの研究テーマや興味関心について話し合いも行われました。



曾於市役所・商工会関係者との座談会



関の尾滝にて



「たからべ森の学校」支配人による紹介



都城島津邸にて

●授業について

今年度のプロ研授業も例年どおり、共同テーマ設定から始まりました。最初は博士課程における研究構想についてそれぞれ紹介し、その中から共同テーマの可能性を見出すよう、お互い知恵を絞ります。その後、提案と議論が繰り返された末、3週目の授業では萩野先生の提案より、「社会と文化におけるネットワークフォーマルとインフォーマルの狭間でー」という共同テーマが決定されました。共同テーマについての解説が石田先生より本報告集の巻頭文にてすでに行われましたので、ここでは割愛します。

今年度プロ研授業のスケジュールが表1のとおり設定されました。しかし、途中から様々な問題が起きて、予定どおりうまくいきませんでした。

表1 平成30年度プロ研授業スケジュール（案）

1	10/ 5	オリエンテーション
2	10/12	共同テーマ検討
3	10/19	共同テーマ検討
4	10/26	共同テーマ検討
5	11/ 2	研究計画発表（3名）
6	11/ 9	研究計画発表（2名）
7	11/30	進捗状況発表1回目（3名）
8	12/ 7	進捗状況発表1回目（2名）
9	12/14	進捗状況発表2回目（3名）
10	12/21	進捗状況発表2回目（2名）
11	1/ 4	研究結果発表（2名）
12	1/11	研究結果発表（2名）
13	1/18	研究結果発表（1名）
14	1/25	最終発表
15	2/ 1	リハーサル
	2/ 2	報告会

主な問題として以下の点が上げられます。

①発表者の減少

当初発表者5名の予定でしたが、2018年末から2019年初めにかけて、そのうちの2名が体調不良や家庭の事情を原因に発表することを辞退してしまいました。幸い今回は個々人で研究を進めているため、減員によるチームワークへの影響はありませんでした。2名の脱落は大変残念に思います

が、残った3名の研究に対する指導の時間がむしろ増えたと言えます。

②個々の進捗状況の遅延

今年度共同テーマ設定が比較的スムーズにできて、プロ研全体の出たしがよかったものの、その後の発表者それぞれの進捗状況に大きな問題がありました。個人差はあるものの、個々の研究の進捗がスケジュールに比べると、大きな遅延が見られました。

まず、私が担当した28年度、29年度の進捗状況に比べると、今年度の発表者はプレゼンに対する準備がだいぶ遅れました。往年の発表者はほとんど進捗状況（11月後半）の段階からスライドを作って授業で報告しました。そのメリットとして、早い段階でスライドに対する修正ができるのと、研究成果の可視化によって、教員も発表者自身も研究の進捗具合や不足点をより鮮明に把握することができる点がありました。しかし、今回の発表者は授業でスライドを提示したのがほとんど最終段階1月中旬以降でした。

また、個々の研究進捗自体にも遅延が見られました。表1でわかるように、1回の計画と2回の進捗発表を経て、1月に入ってからここまでの研究でどのような結果が言えるのかを提示する段階に入るべきでしたが、今回の発表者のうち2名は、報告会前日のリハーサルでやっと結論のところまで仕上げた具合でした。もちろん研究の進捗状況は、共同テーマとの相性や専門の特徴など、様々な要素から影響を受けますが、それでも、自分の研究を自分で運営管理し、予定どおりに進める能力が博士課程や今後の研究生活において求められるのでしょうか。

③2年生関与の希薄化

今年度の2年生、つまり去年発表の経験を持つ院生達の、プロ研に対する関与の希薄化も目立ったものとなりました。具体的にいうと、一部の2年生は、共同テーマや、後輩たちの研究に対する指摘やアドバイスなど、積極的な発言がほとんどありませんでした。授業中に早退することも度々見られます。発表の経験者として一番身近の立場

で助言できるはずですが、この状況は①②の問題にもつながっていると言えるでしょう。かつて2年生も研究し、発表しなければならないプロ研ですが、それが博論に悪影響を与えると懸念され、やがてサポーターとして参加する形に変化して今日に至りましたが、しかし授業だけ出席し、単位をもらうようでは、むしろご本人にとっても時間の無駄遣いになってしまいうでしょう。「他人の研究だから関係ない」のではなく、他人の研究を真剣に見ることによって、自分の研究を客観的に見る目を身に付けていく、こうしたスタンスでプロジェクト研究に関わっていくべきだとここで今後の2年生に注文を付けたいです。

●報告会について

今年度のプロジェクト研究報告会は表2で示したプログラムのとおり行われました。

萩野先生による開会の辞の後、石田先生はプレゼンを利用し、まさに可視化の形で今回の共同テーマの趣旨説明を詳細かつ分かりやすく説明してくれました。

その後、現代社会における問題を扱う日高優介及び山下慶による発表の後、小栗有子先生から2名に対しコメントを述べました。休憩の後、歴史人物を扱う景德により発表が行われ、多田蔵人先生からコメントがありました。

最後に、担当教員や発表者及び来場者を交えて、現代社会におけるネットワークの形や今後の展開についてディスカッションが行われ、高津先生による閉会の辞を持って無事閉会となりました。

●報告会の課題について

今年度のプロジェクト研究の問題点はほとんど授業中に集中し、前文で述べたとおりですので、報告会に関して1点だけお詫びをしたいと思います。

報告会当日、会場の法文棟1号館が外壁改修の工事中であり、ほとんど耐えかねる騒音が報告会中にずっと響いていました。そうした中でも、一生懸命発表する院生や、丁寧にコメントを述べる

コメンテーターの先生方及び参加者の皆さんには感心、感謝する一方ですが、外壁工事があることを事前に把握したものの、そのひどさを想像できず、会場を変更しなかったことを、非常に後悔しています。申し訳ありませんでした。

●謝辞

最後ですが、プロジェクト研究を担当する3名の先生方、また、多忙の中、コメンテーターを引き受けてくださった多田先生、小栗先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。

表2 平成30年度プロジェクト研究報告会プログラム

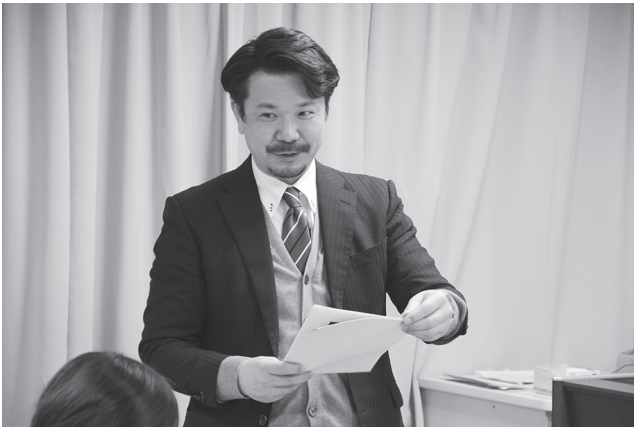
社会と文化におけるネットワーク—フォーマルとインフォーマルの狭間で—		
司会者：松田忠一教授		
13:30 ～ 13:35	開会の辞	地域政策科学専攻長：萩野誠教授
13:35 ～ 13:45	趣旨説明	石田智子准教授
13:45 ～ 14:15	住民運動におけるネットワークの連帯の展開について—1993年の喜入における産廃反対運動を事例に—	日高優介
14:15 ～ 14:20	来場者による質疑応答	
14:20 ～ 14:50	韓国の兵役における個人の人間関係とその動向	山下慶
14:50 ～ 14:55	来場者による質疑応答	
14:55 ～ 15:10	コメンテーター論評	コメンテーター：小栗有子准教授
15:10 ～ 15:25	休憩	
15:25 ～ 15:55	文献に描かれた「曾繁像」	景德
15:55 ～ 16:00	来場者による質疑応答	
16:00 ～ 16:10	コメンテーター論評	コメンテーター：多田 蔵人准教授
16:10 ～ 16:20	休憩	
16:20 ～ 16:55	ディスカッション	
16:55 ～ 17:00	閉会の辞	人文社会科学研究科長：高津孝教授



開会の辞：萩野 誠専攻長



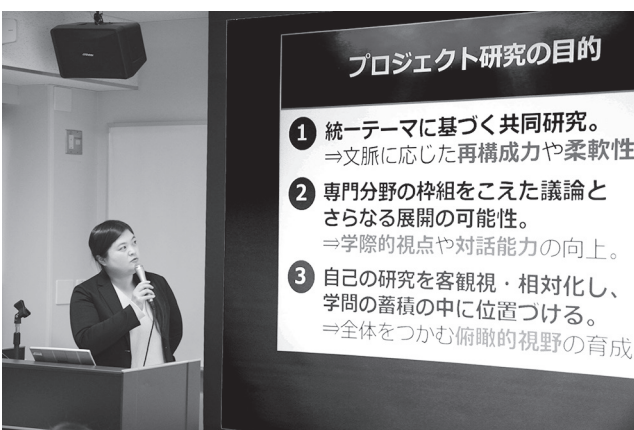
報告者：日高優介さん



司会者：松田忠大教授



報告者：山下 慶さん



趣旨説明：石田智子准教授



報告者：景 徳さん



コメンテーター：小栗有子准教授



来場者による質疑



コメンテーター：多田蔵人准教授



ディスカッション



来場者による質疑



閉会の辞：高津 孝研究科長

プロジェクト研究を振り返って

日高 優介

「ネットワーク」がテーマとなった本年度のプロジェクト研究であったが、私の研究は、まさしくこのネットワークを追いかける中でたどり着いた対象でした。2017年、修士論文のフィールド調査を行う中で、今回取り上げた喜入の産廃処分場誘致計画に対する反対運動の存在を知りました。「かつて、産廃処分場誘致計画に対する反対運動があった」という地元の人による語りに興味を惹かれた私は、明確なリサーチテーマも持たずに、当該集落の集会所をアポなしで訪ねました。たまたま集会所にいた人びとから得た断片的な情報を元に、反対運動の元活動家にたどり着く事ができ、またその方からの紹介で別のインフォーマントたちに出会う事ができました。当時について、他人ごとのように語る人、今も続く問題として語る人。資料は全て廃棄したと語る人、今もなお膨大な資料を持ち続ける人。亡くなった人、地域を立ち去った人。リサーチを続けるなかで、地域社会における四半世紀という時間の経過を実感しました。しかし、修士論文のテーマと直接的に関連していなかった題材であった為に、今回プロジェクト研究として取り組むまでの2年間、日の目を見ることはありませんでした。

今回、改めて本事例について検討する中で、発表の内容とはまた別に、多くの「私」を中心とする「繋がり」について考えました。私人としての私と研究者としての私。フィールドと研究室。調査テーマやインフォーマントたち。25年前、2年前、現在、そして未来。そのような意味においても、本プロジェクト研究は私にとって、とても有意義なものとなりました。

本年度のプロジェクト研究は序盤から多くの困

難を抱えていました。決まらないテーマ。進まない研究。離脱するメンバー。ご指導頂いた萩野先生、松田先生、石田先生、熊先生や博士後期課程の先輩方は大いに頭を抱えたと考えます。そのような中でご指導頂き発表に至ることができたのは、ひとえに皆様のおかげです。また、授業外でご指導頂きました、桑原季雄先生、桑原司先生、片桐先生、農中先生。発表会の場で貴重なコメントを頂きました、小栗先生、高津先生、丹羽先生にも厚くお礼申し上げます。本経験を胸に今後の研究を進めていきたいと思っています。

山下 慶

私は、韓国における徴兵制について研究する身として、プロジェクト研究では軍隊における人間関係について研究を行いました。終わらせたという達成感はありませんでしたが、自身の研究分野でありながら、今回の私の取り組みとしては反省点ばかりであるというのが率直な感想です。

そもそも博士課程の先輩たちからは「プロジェクト研究は地獄だ」と聞いてはいたのですが、自身の力不足で初めから最後まで悩むに悩んだ活動となり、まさに地獄にいる状態でした。また、研究を面白いという気持ちや愛がある気持ちだけでは成立しないということが痛いほどわかったように思います。

まず、共通テーマを決めた時点で皆、テーマの理解を行うことから苦しんだように思えます。私自身まさにその状態であり、あらゆる先生方からアドバイスをいただいてなんとか定義を考えることが出来ました。また、実際に韓国にも2度調査に赴き、インタビュー調査を行うだけでなく、今

後も付き合っていけそうな仲間も出来ました。

しかしながら、その後の報告書作り・発表準備では何度も挫折を味わい、毎日泣いているような状態でした。寝る間も惜しんでどんなに時間をかけて、考え直しても形にすることができない辛さというのは今となっては自身の財産となったと思います。また、恥ずかしながらまとめ方や本当に基本なことも、今回で少しは身に着けることが出来ました。

今回の活動を通して、協力してくださったインフォーマントの皆さん、優しく最後まで励ましてくれた先生方、私の状態を気遣いかつ声をかけ心配してくださった先輩、本当にありがとうございました。皆さんのご厚意と優しさに報いるためにも今回の反省を生かし、今後も邁進していきたいと思っています。

景 徳

博士後期課程1年の後期、プロジェクト研究（以下プロ研）で充実した半年間を過ごし、自分が大きく成長したと感じます。最初はプロ研の参加者と一緒に曾於市や都城市で合宿しました。現地の自然や文化を体験しながら、自分の研究内容を検討しました。博士論文では薩摩藩侍医「曾槃」に関する研究をしたいのですが、曾槃の何について研究するのが絞っておらず、参加者の皆さんと議論の末、人物像としての「曾槃像」をテーマに決めました。その後、文献調査や現地調査を駆使し、今回の中心資料となる「曾氏家系記碑」と「曾氏家牒」に辿り着けました。

プロ研では、発表者の専門分野も研究テーマもそれぞれ異なりますが、萩野先生の提案で、「文化と社会におけるネットワークフォーマルとインフォーマルの狭間で―」という共同テーマの元、各自研究を進めました。自分の研究を進めながら、共同テーマとの関連性も考えなければならないことは、予想以上に大変でした。最初の頃、取り扱う文献の範囲もその分析方法も定まっていません

でしたが、12月に長崎の皓台寺にある「曾氏家系記碑」を調査してから、それと「曾氏家牒」を合わせて「曾槃像」に接近する方向がやっと明確になりました。その後、先生方の指導の元、発表会直前に「曾氏家系略図」を作成することができました。

当日の発表会では30分間の発表やディスカッションを行い、また、コメンテーターの論評や質問を受け、改めて自分の研究に不足な部分を気づきました。今後曾氏一族の地縁・血縁及び他の医家氏族との関係についてさらに注目する必要があります。

今回のプロジェクト研究に参加することによって、共同研究と現地調査の重要性に対する認識が高まり、今後の研究生活にいかしていきたいと思っています。最後に、熱心にご指導・ご意見を下さった萩野先生、松田先生、石田先生や、相談に乗ってくださった先輩方や同級生たち、そして、プロ研の運営にご尽力くださった熊先生に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

プロジェクト研究とは

「プロジェクト研究」は、地域政策科学専攻の必修科目である。この授業を通して、学生は自己のテーマや調査研究方法を模索し、中間発表を重ねて教員や他の学生からの意見や助言を聞き発表内容を固めながら、他分野の発表を聞き意見を陳述することで、研究者としての力を総合的に高める。

＊プロジェクト研究報告会は、この授業の一環として学生主体でテーマを決め、開催するものです。

平成30年度「プロジェクト研究報告会」概要

総合テーマ：社会と文化におけるネットワークフォーマルとインフォーマルの狭間で―

開催日時：2019年2月2日（土）13：30～17：00

会場：郡元キャンパス 法文棟1号館202教室

◇研究報告

日高 優介（島嶼政策コース1年）

山下 慶（文化政策コース1年）

景 徳（文化政策コース1年）

◇コメンテーター

小栗 有子（法文学部准教授）

多田 蔵人（法文学部准教授）

◇司会

松田 忠大（法文学部教授）

平成30年度「プロジェクト研究」参加一覧

履修院生：

地域政策コース 金子 信一（2年）、蔣 奇武（2年）、江 山（2年）、
江 駿（2年）

文化政策コース 趙 琳（2年）、山下 慶（1年）、景 徳（1年）、
高 春燕（1年）

島嶼政策コース 迫田 耕一（1年）、日高 優介（1年）

担当教員：萩野 誠（島嶼政策コース・人文社会科学研究科教授）

松田 忠大（地域政策コース・人文社会科学研究科教授）

石田 智子（文化政策コース・人文社会科学研究科准教授）

指導補助：熊 華磊（人文社会科学研究科特任助教）

プロジェクト研究報告集 第16号

印刷 2019年 3 月22日

発行 2019年 3 月28日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

(博士後期課程) 地域政策科学専攻

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番30号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=13129

印刷・製本 濱島印刷株式会社

©2019無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648